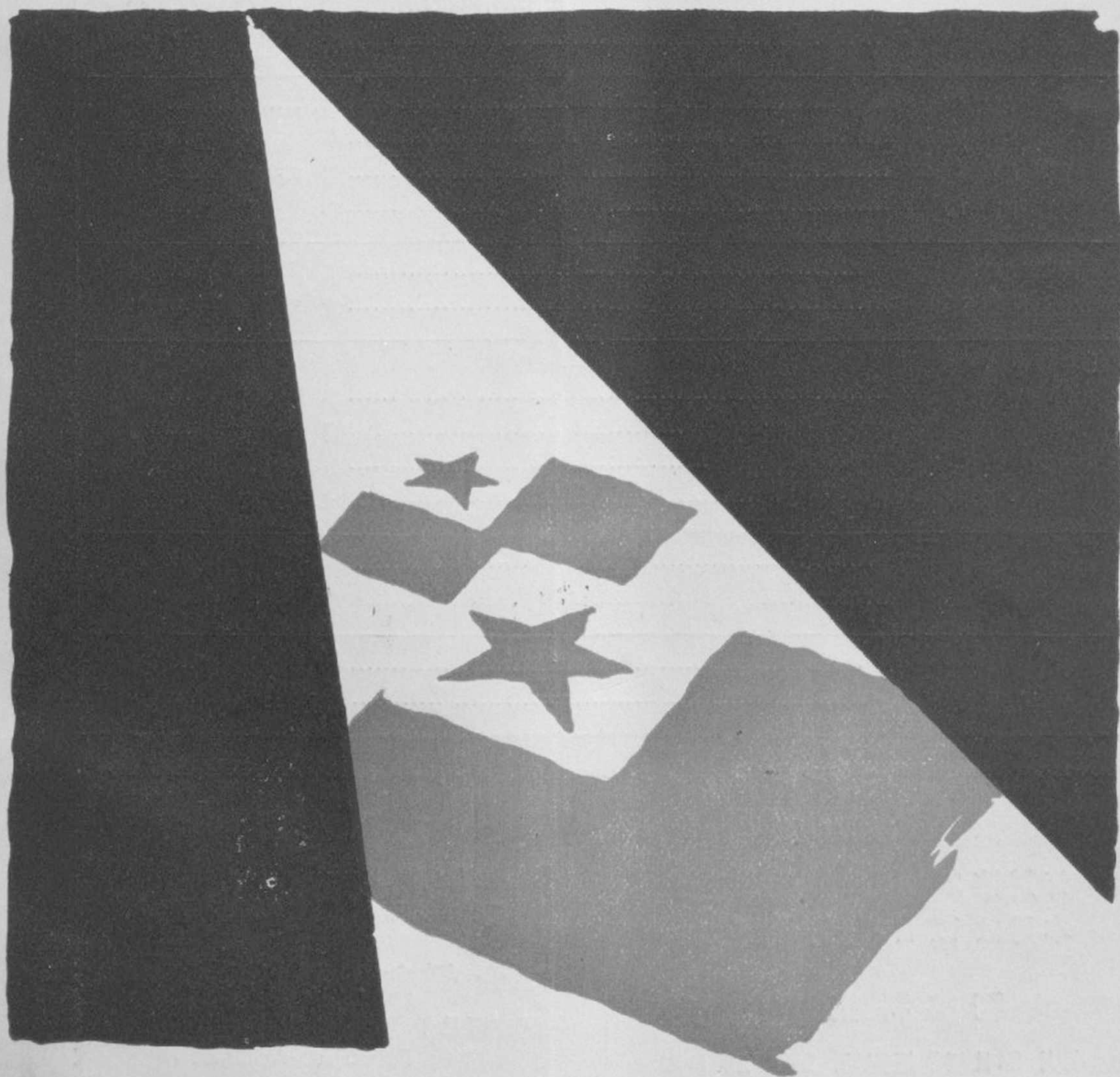
La Revuo Orienta

— 1931 —

JARO XII MAJO N-RO 5



Japana Esperanto-Instituto
Ŝin'ogaŭa-maĉi, Usigome, Tokio, Japanujo.



目　　次

表紙　植野盛好

★役員會例會★

每月第2火曜日に催します
本月は12日午後7時より

★初等科講習會★

4月9日新學級開始，5月23日迄
每週 月曜・木曜……午後7時—9時
會費　1ヶ月　1圓

★中等科講習會★

每週月曜・木曜……午後1時半—3時
會費　1ヶ月　1圓　用書　Marta

★例會兼研究會★

每週水曜日午後7時より
用書　Fabeloj de Andersen II
會費　不用
近來出席多く愉快な會合です．輪講中詳細な語法講義あり．

拘束か 自由か

小坂狷二

過般ある人からあらゆる造語を網羅した大辭典を作つて各其意義を確定せれば人が勝手に造語して使用するため混亂に陷る惧があるまいかと云ふ質問が來た。これは基本文法第15條の單語採用の方則を讀んで初學者がよく抱く恐れである（私はそれ故基本文法十六條を初學者には紹介しない）。單語の製造は個人に委せず委員でも設けて撰定し、之をエスペラント國に發布して使用せしめるがよいと考へる人があるかも知れぬが、かゝる拘束は國際語を殺すもので、決して生かし、生長せしめる道ではない。

國際語 Volapük の創案者 Schleyer 師は此の拘束の長策をふるつて失敗してゐることは吾人のよい戒である。シユライヤーは一單語の採用、補足も盡く創案者たる自分の許可を要するものと定め、以て天下の使用者に號令せんとした。然しこれは大なる誤謬である。一個人がよく百般の事柄に通曉して撰定を誤らぬと云ふ事は不可能であり、又一個人の嗜好は他の人には必ずしも氣に入らない。反對が起るのは當然である。これは委員會の場合も同樣で、委員會の決定に於ては plej bona なものが滿場一致できまることなどは稀有な事で多くの場合は各委員が不滿を抱いたまゝ多數決できめた kompromiso である。從つてかゝるものが發表されても一般の人は法律的强制々裁のない限り之を甘んじて使ふことはしないであろう。

Esperanto は全く他の途をたどつた。創案者 Zamenhof がその發表と同時に一切の權利を放棄して其の語を Esperanto-popolo たるその使用者の絕對自由にまかせたのは甚だ賢明なる事と云はねばならない。Fundamento にない語は使用者が自分の責任を以て造つて使用した勿論時に同じ事柄に對して二つ以上の語が使用されたこともあつた。然し優勝劣敗の法則によつて一般の人に好まれるものが殘つて劣れるものは自然淘汰せられる。例へば『日本人』の意に初めは japano, japono が用ひられたが前者が殘り後者は程なく消滅した。これは全く自然語の行く道で、Esperanto が今日の榮えある域に達したのは、全くこの Zamenhof の敢斷な先見の明を證する語の絕對不拘束、自由と、一般 Esperantistoj が我儘を押へて一致した統制精神によるものである（エスペラント言語委員や Akademio はあるがこれは語を採用するなどの權能はなく一般の Esperantistoj が廣く使用するに至つた語を後から採錄して Universala Vortaro の補遺として發表するだけである）。更に造語に至つては一定明確な造語法の存在するに於てをやである。

委員會が造つた國際語は嘗てなく、又言語學者などが獨りよがりで造り上げた國際語が一つとして生命の曙光さへも見せなかつた事實とを思ひ、1912年第八回萬國大會に於ける Zamenhof の次の言葉を考へれば質問者の如き心配は全くの杞憂であることが納得せられるであろう：

『二十五年前（發表當時）私は二十五年後に Esp. がまだ存在してゐるだろうか、又存在してゐるにしても最初の年に書かれたものがなほよく人に了解されるだろうか、英國の Esp.-isto が西班牙の同志を了解し得るであろうかと心私かに憂えたのですが、今や歷史は完全に安心な答をしてくれてゐる。御承知の如く二十五年前に上手な Esp. で書かれたものも缺くる所なく今日その價値を存して居り、讀者はそれが此の語の存在の初年に書かれたものであると云ふことすら氣付かぬ程である。英國の良 Esp.-istoj の文體と西班牙人のそれとの間には絕對に何等の差違もありませぬ。吾々の Esp, は斷えず發達し、豐富になりました、然し乍ら規則的に發達して行つたお蔭で變化することなく、決してより古い時代の語との連絡を失ふことがなかつたのです……二十五年の試練に堪え、人間の一時代を物の美事に過し得、其の使用者の多くよりも年を經て居り、大なる且つ益々隆んに增加してゆく文獻を有し、已にその歷史と傳統と、確たる精髓と明乎たる理想を有する此の如き語は最早何ものかゞその今日までたどつて來た自然の道からそれを追ひ落すなど云ふ事を恐れることは決してないのであります。

EL FABLOJ DE EZOPO

(初等譯註イソップ寓話)

小坂狷二

HUNDOJ KAJ FELOJ

Kelkaj malsataj hundoj vidis krudajn felojn, kiujn defelisto lasis en la fundo de rivereto, kaj, ne povante ilin atingi, interkonsentis, ke ili eltrinku la rivereton por atingi la gajnotaĵon. Ili tuj komencis sian laboron, sed ili ĉiuj krevis de troa trinkado, antaŭ ol ili iel venis proksimen al la feloj.

Povas esti, ke tiuj, kiuj penas atingi celon per senprudentaj rimedoj, sin ruinigos en la klopodo.

犬と皮

空腹な犬が何匹か皮師 (de'fel'isto) が小川の底に置いて置いた (lasis) 生ま皮を見ました，そしてそれに届くことが出來ないので(ne pov'ante) 此の獲物に(gajn'ot'aĵ'ojn) 達するため小川を飲み盡さう (el'trinku) と相談一決いたしました(inter'konsentis)。犬はすぐ樣その仕事にとりかゝりました；然し皮に何とか (iel) 近づきもせぬ內に(antaŭ ol … venis proksim'e'n)皆飲みすぎのために(pro tro'a trink'ado) おなかゞさけてしまひました(krevis)。

馬鹿げ切つた (sen'prudenta) 方法で目的を達しようとつとめる者共が其努力に身を亡すに至る(sin ruin'igos) ことはありそうな事。

---

kruda (精製せぬ) 未製の，天然のまゝの (原料など)，(調理をせぬ) なまの

- haŭto (人，動物の) 皮膚
- felo (毛付のまゝの) 皮，毛皮
- ledo (felo を tani して製した) なめし革
- pelto (襟卷，外套などにするための美しい毛の felo) 毛皮 peltmantelo 毛皮外套

de'fel'(ig)isto (皮をはぐ商賣の) 皮師

lasi (あるが儘に)置いて置く，(するがまゝに) させて置く，させる。

Lasu lin iri, (se li volas) 行きたいなら行かせるがよい。

Lasu min sola! (邪魔です，あつちへ行つて下さい (ひとりで置いといて下さい)。

Enlasu min! なかへ入れて下さい。

Lasante post si la florantan ĉefurbon, …… 花の都をあとにして……

Ŝi ellasis akran krion. キヤツと叫んだ

Li forlasis Tokion por ĉiam. 永久に東京を去つて行つた

Tion oni ne devas lasi rimarki. これや人に氣どられてはならない。

- Mi renkontis lin. 彼に出遇つた。
- Mi atingis la celitan lokon. 目的地に達した。
- Mi trafis la ĝustan vagonaron. 列車に間にあつた。

〔注意〕此等の語は皆他動詞として用ひられる (それにぶつかる樣な ideo)。

- gajn'aĵo (＝多く gajnitaĵo) 獲物
- gajn'ot'aĵo これから手に入るべき獲物

- Povas esti, ke li mensogis. 奴がうそをつくなんてありそうな事だ。
- Ĉu li mensogis? Tre povas esti. 奴うそをいつたつて? そうだろうともさ。

Revenu, antaŭ ol vesperiĝos (＝antaŭ vesperiĝo) 日のくれぬ內にお歸り〔antaŭ は前置詞；antaŭ ol は接續詞〕

PATRO KAJ DU FILINOJ

Viro, kiu havis du filinojn, edzinigis unu al ĝardenisto kaj la alian al potfaristo. Post iom da tempo li vizitis la ĝardeniston kaj demandis sian filinon, kiel al ŝi estas ĉe la nova hejmo. „Treege bone,“ ŝi diris,

父親と二人の娘

娘を二人持つてゐた男が一人を植木屋 (ĝarden'isto) に，も一人を燒物師 (pot'far'isto) に嫁にやりました (edz'in'igis)。暫くしてから (Post iom da tempo) 彼は植木屋を訪れ、その娘に新家庭に於ける具合はどうだ (kiel al ŝi estas) と尋ねました。『すてきに (tre'ege) いゝわ』と娘は云ひました『何でも欲し

„ni havas ĉion, kion ni deziras; mi havas tamen unu preĝon, ke ni havu pluvegon por akvi niajn plantaĵojn.“ Nun la patro foriris al la potfaristo kaj demandis la alian filinon, kiel iras al ŝi aferoj. „Ni havas nenion plu deziri,“ ŝi diris, „sed mi nur esperas, ke tiu ĉi bela vetero kaj la varmega suno daŭradu, por ke niaj tegoloj bone bakiĝu.“ „Ho ve!“ diris la patro, „se vi deziras belan veteron kaj via fratino pluvon, por kio do mi mem preĝu?“

い物はあるし；だけど一つお祈りがあるのよ，うちの植木に（plant'aĵ'ojn）水をくれる（akvi）ために大雨があるようにと』扨て父親は去つて燒物師の處へ行きました，そしても一人の娘に物事がうまく行つてゐるかきゝました。『申し分ありませんの（これ以上望むものなし）』と娘は申しました。『ですが、たゞうちの瓦がよく燒けるように（bak'iĝu）このよいお天氣と熱いお陽樣がつゞいてゆけばよい（daŭr'adu）と望んでゐます』『やれまァ』と父親は云ひました『お前は上天氣を望み，姉さんは大雨をほしがると（se），此のわしは（mi mem）一體（do）何を（por kio）お祈りしたらよいのぢや』。

ĝarden'isto 庭園師，植木屋
pot'far'isto 壺作り師，燒物師（pot'isto は瀨戶を賣る人でも作る人でもどちらでも）
akvi＝pri'verŝi（植木に）水をやる
akv'umi（布洒しなどに）水に浸ける
planti 植える；plant'aĵo 植木，作物
Kiel iras la afero? 一件の次第はどうだ。
La afero iel ne iras glate. どうした事かすらすら事件が運ばぬ。

Ĉu vi havas ion por deziri? 何かお望みがありますか。
Lia traduko lasas nenion por deziri. あの人の譯は申し分ありません。
esperi（心に期待を抱き）希望する〔希望〕
deziri（欲しいと）慾する〔慾望〕
voli（何々）したいと思ふ〔意志〕
baki（パン，菓子，瓦などを窯で燒く
rosti 肉をロース燒きにする，炙る
kuiri ovon 卵を燒く
bruligi lignon 木を燒く（燃す）

KOLOMBO KAJ KORVO

Kolombo, kiu estis enfermita en kaĝo, gratulis sin pro la nombro de siaj idoj. „Ĉesu, bonanimulo, tiel fieri pri tio,“ diris la korvo, „kiom vi havas da idoj, pro tiom da sklavoj vi devus ĝemi.“

Kio estas beno en libereco, estas malbeno en sklaveco.

鳩と烏

籠の中に閉ぢ込められて（en'ferm'ita）ゐた鳩が自分の子供（idoj）の數が多いとて（pro la nombro）悅に入つてゐた（gratulis sin），『お人よし先生（bon'anim'ulo），そんな事を（pri tio）そんなに自慢するのはよせよ』と烏が申しました『君の持つてゐる子供の數だけ（kiom…da）それだけの奴隸の身をあはれに思つて（pro）呻吟せれはならぬ筈なのだ（devus ĝemi）』。

自由（liber'eco）に在つて祝福たるべきものも囚の身（sklav'eco）では禍となる。

animo（死すれば消滅する肉體 korpo に對して不滅の）靈，（持つて生まれた心の善惡の源たる）心靈。
spirito（元氣の素たる）意志，精神，（大和魂などの）魂，（肉體をはなれて考へる姿たる）魂，亡靈。
gratuli（人の成功などをお目出たうと）祝ふ，祝する，賀する
gratuli sin（己が好運を）喜ぶ

ĝemi（苦んで）呻く，（壓制や過重の荷に）あへぎ苦しむ
ĝeni（人を）煩はす，面倒をかける
devi（何々）すべきである，せればならぬ，（何々すべき）筈である。
ne devi（何）すべきでない，してはならぬ
kiom vi havas da idoj＝kiom da idoj vi havas

エスペラント中等講座（5）

［本講の註釋は單に語義の理解のみに滿足せずエス語の語學的研究を目標とした。材料はザ博士譯アンダアセンお伽噺第二卷「マッチ賣の娘」］

岡本好次

Kaj kio[1] estis ankoraŭ[2] pli[2] ravanta,[3] —la ansero elsaltis el la plado[4] kaj kun forko kaj tranĉilo en[5] sia dorso[5] balanciĝante[6] ekiris sur la planko; ĝi iris ĝuste en la direkto[7] al la malriĉa knabino. Sed la alumeto estingiĝis, kaj oni vidis plue[8] nur la dikan malvarman muron.

Ŝi ekbruligis novan alumeton. Kaj jen la knabineto sidis sub plej belega Kristnaska[9] arbo[9]; ĝi estis ankoraŭ pli granda kaj multe[10] pli[10] riĉe ornamita ol tiu, kiun ŝi en la sankta[11] vespero[11] vidis tra la vitra pordo ĉe la riĉa komercisto. Miloj da kandeloj brulis sur la verdaj branĉoj, kaj mikskoloraj[12] bildoj,[12] similaj al tiuj, kiuj estis ekspoziciitaj[13] en la fenestroj[14] de la magazenoj, rigardis sur ŝin; la knabineto etendis al ili ambaŭ manojn,—tiam la alumeto estingiĝis. La multo da Kristnaskaj[15] kandeloj[15] leviĝis pli[16] kaj[16] pli[16] alten, kaj nur nun ŝi vidis, ke tio[17] estis la helaj steloj. Unu el ili falis malsupren[18] kaj trenis[19] post si tra la ĉielo longan strion da fajro.

"Nun iu mortas!" diris la knabineto, ĉar la maljuna avino, kiu sola estis afabla en[20] rilato[20] al ŝi, sed nun jam[21] delonge[21] plu[22] ne[22] vivis, estis[23] dirinta[23]: "Kiam stelo falas, tiam unu animo leviĝas al Dio."

Ŝi frotis denove unu alumeton je la muro[24]; ĝi ĵetis ĉirkaŭ sin vastan[25] lumon, kaj en la brilo de ĉi tiu staris la maljuna avino, hele prilumita,[26] milda kaj afabla.

【譯】そして猶一層嬉しかつた事は——鵞鳥が皿から躍りだしてフォークとナイフを背中につけたまゝで床の上をヨチヨチと行き出した事です；——しかもそれは丁度この貧しい少女の方にむかつて歩いてきました。併しその時マッチが消えました、そして其後はたゞ厚い冷い壁が見えるばかりでした。

彼女は更に新しいマッチをつけました。所が少女はすてきに奇麗なクリスマス樹の下に坐つてゐました。それは彼女がクリスマスの晩に金持の商人の家でガラス戸越しに見たのよりはもつともつと大きなそして遙かに美々しく飾られたものでした。何千といふ蠟燭が綠の枝の上に燃えてをり、又商店の飾窓の中に陳列されてゐる繪の樣な色々の色彩の繪紙が彼女を見下してゐました。少女はそれにむかつて兩手をさしのべました——その時マッチが消えました。するとその澤山のクリスマスの木の蠟燭がだんだん高く上つて今は唯それが明るい星になつたのだと知りました。その星の一つが下へ空中を尻に長い火の尾をひいて落ちました。

『今誰か死ぬのだわ』と彼女が申しました。それといふのは彼女に對して唯一人親切を盡してくれてゐたが、今はもうずつと前からこの世にゐない年老いた祖母さんがよく『星が落ちる時には一つの魂が神樣のところへ昇つてゆくのだ』と云つてゐましたからです。

彼女は更にもう一つのマッチを壁ですりました。マッチはまはりに幅廣くあかりを投げました。そしてその光の中にあかあかと照らされた、やさしい親切な年老いたお祖母さんが立つてゐました。

【註】 1. kio … こゝの所は F.S-G 譯では Kaj jen tio, kio estis ankoraŭ pli belega : la ansero saltis el la plado, skuiĝante ĝi iris sur la planko, portante en la dorso tranĉilon kaj forketon; ĝi venis rekte al la knabineto;—sed …. となつてゐる。この譯の方が判りがよい。この譯文では ankoraŭ pli belega な事 (tio) があつたと云つてその事柄 (tio) を dupunkto (:) 以下の文が說明してゐるのである。こういふ風に dupunkto の次の文句は前の文句の說明である事が多い。

Z 博士譯も卽ち F.S-G 譯と同じことを云つたもので streko (——) の後の la ansero elsaltis …… 以下の文がその前にある kio を說明してゐる事になる。

2. **ankoraŭ pli** 猶一層、その上更に

3. **rav'anta** ravi は人を恍惚たらしめる事、人を有頂天たらしめる事であるから ravanta は「惚々させる」とか「嬉しがらせる」とかいつた意味である。

4. **plado** "Granda telero, kiu servas por alporti sur la mezon de la tablo la manĝaĵojn, kiuj estas disdonotaj en la teleron de ĉiu manĝanto" と云ふ SAT 版の Plena Vortaro の difino が示す様に telero よりも大きなもので御馳走を山盛にもつた大皿で、この大皿を客の前へ持つて行つて客に（又は kelnero が分配）自身とらせる様にするのである。客自身の前には telero が置いてあるわけである。つまり客は plado の中のものを自分の telero によそひわけて食べるのである。だから洋食などで皿数で何品料理とよぶ時には plado を幾何とよぶ事にするのが普通である。telero の数では數へない。それは洋食店等とちがひ個人の宅では telero を換へないで同じ telero の中へ順次に plado から入れる事にする事もあるからである。

5. **en dorso** 普通は背に負つてゐる場合は sur la dorso であるが、こゝでは forko も tranĉilo も背中に突きさゝつてゐるもの故 en を用ひたのである。

6. **balanc'iĝ'ante** 上下とか前後左右に振子の樣にふる事を balanci と云ふ。balanc'iĝ'i は自動即ちふれる事である。こゝでは身體が balanciĝi してゐる事をさしたものと思ふ。

7. **en la direkto** direkto はある方向方角を示すもので、その方向に於ての意味故前置詞は en を用ひる。ĝuste en la direkto で「正しく……の方向」と云ふたもの F.S-G のは rekte al となつてゐる。

8. **plu'e** plu はそれから先、それ以上の意です。plu はそれの強い形で、こゝでは「その先は」「その後は」の意になる。

9. **Kristnaska arbo.** Krist'na-ko はクリスマスを云ふ。Kristnaska arbo はクリスマスの時立てゝいろんなものを飾りつける木を云ふ。Kristnaska を大文字で書き始めたのは祝祭日たる Kristnasko を大文字で書く習慣からその形容詞も大文字にしたものと思ふ。小文字でもよいと思ふ。

10. **multe pli** 遙かに一層。一般に比較級は pli をつかふが比較してみてとても比較にならぬ程かけはなれてゐる場合には、この樣に multe pli をつかふのである。

11. **sankta vespero** クリスマスの晩を云つたもの（Millidge の Esp.-Eng. Dictionary によると）。この所は F. S-G. の譯では la lastan Kristnaskan feston. と書いてあるが、この Z 博士譯には lasta と云ふ字を忘れたのかもしれない。

12. **miks'koloraj bildoj** いろんな色のまじつたもの。bildo は繪であるが、こゝでは繪紙をさしたものと思ふ。

13. **ekspozici'it'aj** 展觀させられた、出陳された の意。

14. **fenestroj** F. S-G では butikfenestroj となつてゐる。店頭のショーウインドーをさしたものである。普通 montra fenestro とよぶ。ついでに商店内の陳列箱などは montra vitr'aĵ'o, montra kesto（いづれも Millidge のエス英辭典に出づ）等とよぶ。

15. **Kristnaskaj kandeloj** F. S-G. 譯のと同じこと。

16. **pli kaj pli alt'e'n** だんだんと高くへ。

17. **tio** は la multo da Kristnaskaj kandeloj を「それ」と指示したのである。

18. **mal'supr'e'n** 下へ。上へは supr'e'n

19. **treni post si longan** … 自分の後に longan ……を曳づつてゐる意である。

20. **en rilato al ŝi** 直譯すれば、彼女に對する關係に於てである。簡單にすれば rilate al ŝi とできる。彼女に關して、彼女についてである。

21. **jam de'longe** 旣にずつと前から。

22. **plu ne** もはや……せぬ。こゝではもはやこの世の人 (vivi) ではなかつた意、卽ちずつと前に死んでゐた意である。

23. **estis dirinta** F. S-G では ofte diris となつてゐる。ofte diris の意には dir'ad'is としてもよい。estis dir'int'a は ofte diris の意味はないが、しかし diris（diris だけでは唯一度云つたと云ふ事になる）よりは幾分重いからこのものをつかつて diradis の意味を幾分含ませたものかと思ふ。

24. **je la muro** 壁で。F. S-G 譯では kontraŭ la muro となつてゐる。

25. **vasta lumo** lumo のとどく範圍が vasta だといふのである。

26. **pri'lum'it'a** あかりで照らされた。pri'lumi は燈火の如き發光體がものをてらす事。この時 pri は接頭字的に用ひられたもの、こういつた pri の用法については餘白がないから次號で說明する。

作 文 添 削 欄

伊 藤 己 酉 三

El mia taglibro.

Lastan varman tagon kvazaŭ printempan, sur la vojo hejmen, pretespasante antaŭ la domo de vilaĝkuracisto, mi subite ekaŭdis bruegon de kelkaj samvilaĝanoj, inter kiuj estas virinoj kaj etaj bubaĉoj. Mi tuj rekte alproksimiĝis al ili. Ho, kia komika teatraĵo estas disvolviĝinta antaŭ ni! Eta bovido flavruĝokolora jen eksaltas jen ekkuras, turnante sin tien kaj reen sur la tegmento. Sed oni ja havas neniun rimedon forpeli ĉi tiun petlulon sur la teron! Dume iu junulo el ili, venigis bovokomerciston tien, kaj unuvoĉe la vilaĝanoj demandis lin; "Sinjoro, kion ni povas fari al tiu ĉi bruteto?" La bovokomercisto respondas nenion, ĉar li havas multajn spertojn por direkti tian dombeston. Li tuj komencis supreniri la tegmenton kun stiko en la mano. La gajiĝinta bovido ankoraŭ daŭrigas sian dancadon tute malordan; sed kiam ĝi ekvidas homan figuron neatendite aperintan, ĝi ne kuraĝis plie saltadi; kvankam tre ofte ĝi provis resti sur la tegmento.

Unu kolera voĉo de l' bovvendisto tuj forkurigis etulon rekte malsupren, al la tero! temen li ne uzis eĉ unufojon la stikon. La kurteno tiamaniere estis faligita. (B. Enomoto)

inter kiuj の次は estis とする。estas disvolviĝinta は estas ludata 又は estas prezentata とした方がよいでせう。flavruĝokolora は flavruĝa で充分です。turnante sin は不要と思ひます。neniun rimedon は nenian rimedon とする。petlulo は petolulo の誤り。iu junulo el ili の次の , は要りません。動詞の現在と過去とが交互になつてゐますが何れかに統一すべきでせう。por direkti は pri la direktado de とする。stiko は新撰エス和にはありますが bastono が普通です。malorda は senorda でもよろしい。homan figuron は單に homon とした方がよいでせう。figuro は外形ですから homan figuron では人間の形をしたものが見えた事になります。plie は plu とします。tre ofte は變です。ankoraŭ としたらどうでせう。etulon の前に la を置く。此處の tamen は變です。la bovvendisto を主語として ne uzante とした方がよろしい。voĉo は per unu kolera voĉo とします。estis faligita は單に falis とします。

訂正したものは次の如くになります。

La lastan varman tagon kvazaŭ printempan, sur la vojo hejmen, preterpasante la domon de vilaĝa kuracisto, mi (subite) ekaŭdis bruegon de kelkaj samvilaĝanoj, inter kiuj estis virinoj kaj etaj bubaĉoj. Tuj mi (rekte) alproksimiĝis al ili. Ho, kia komedio (komika teatraĵo) estas prezentata antaŭ ni! Eta bovido flavruĝa jen eksaltas, jen ekkuras tien kaj reen sur la tegmento. Sed oni ja havas nenian rimedon forpeli ĉi tiun petolulon sur la teron. Dume iu junulo el ili venigas bovkomerciston tien, kaj la vilaĝanoj unuvoĉe demandas lin, "Sinjoro, kion ni povas fari al tiu ĉi bruteto?" La bovkomercisto respondas nenion, ĉar li havas multajn spertojn pri la direktado de tiaj hombestoj. Li tuj komencas supreniri la tegmenton kun

bastono en la mano. La gajiĝinta bovido ankoraŭ daŭrigas sian dancadontute malordan. Sed kiam ĝi ekvidas homon neatendite aperintan, ĝi ne kuraĝas plu saltadi, kvankam ĝi ankoraŭ provas resti sur la tegmento.

Per unu kolera voĉo la bovvendisto tuj forkurigas la etulon (rekte) malsupren sur la teron, eĉ unu fojon ne uzante la bastonon.

Tiamaniere la kurteno falis.

( ) は省く事。

~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

Je 11.30-a ellitiĝis, sed mi jam vekiĝis en litaĵo.

Tiam jam frateto leviĝ's.

Post malfrua matenmanĝo iris al naza hospitalo kiel ĉiam.

Posttagmeze ĉe unua etaĝo estis en diversaj paroladoj aŭ en legado kun frateto.

Post vespermanĝo vizitis amikon por de longe. Ĉiam li bonveniĝas min afable. Kaj kun li parolis amike ĝis 10-a pri kroniko aŭ literaturo.

Adiaŭis promese ree revidon.

Rehejmon, revenis kantante "Espero" en malvarmega vento.

Frateto ankoraŭ ne enlitiĝis, li morgaŭ devas iri lernejon.

De fremda samideano venis leteron, ke mi hodiaŭ ĝojigis tre.

Je 11-a enlitiĝis kune frateto.

目が醒めたのは起出た前ですから jam antaŭe estis vekiĝinta としなければなりません。日記では mi は省略するのが普通です。en litaĵo よりは en la lito とした方がよいでせう。

leviĝis は estis leviĝinta とする。

naza hospitalo は nazhospitalo とした方がよいでせう。

estis en diversaj paroladoj aŭ en legado は interparolis kaj legis としなければなりますまい。

por de longe は久し振りでの爲でせうが、それならば post longa tempo, bonveniĝas は bonvenigas としなければなりません。kroniko は新聞雜誌の時事欄ですから、この場合は novaĵoj としなければなりません。pri kroniko aŭ literaturo は kroniko か或は literaturo の何れかに就いての意ですから、aŭ は kaj としなければなりません。

promese ree revidon は promesante revidon. とします。

Rehejmon… は Revenis hejmen… としなければなりません。

fremda samideano は未知の同志で、外國同志ならば fremdlanda 又は alilanda samideano とすべきです。leteron は letero の誤り。ke は前の文に接續すべき語がありませんから、Ke hodiaŭ venis letero de fremdlanda samideano, tre ĝojigis min. 又は Hodiaŭ mi estis tre ĝoja tial, ke venis letero de alilanda samideano. としなければなりません。

kune frateto は kun 又は kune kun frateto としなければなりません。

更に少し訂正を加へて書直しますと。

Je 11.30-a ellitiĝis, kvankam estis jam antaŭe vekiĝinta en la lito, kaj trovis frateton jam leviĝinta.

Post malfrua matenmanĝo iris al la nazkuracisto kiel en ĉiu tago.

Posttagmeze sur la unua etaĝo interparolis kaj legis kun frateto.

Post vespermanĝo vizitis amikon post longa tempo. Ĉiam li bonvenigas min afable. Kaj amike parolis kun li ĝis 10-a pri novaĵoj kaj literaturo.

Adiaŭis promesante revidon.

Revenis hejmen kantante "Espero" en malvarmega vento.

Frateto ankoraŭ ne enlitiĝis, li morgaŭ devas iri la lernejon.

Ke venis letero de fremdlanda samideano, tre ĝojigis min hodiaŭ.

Je 11-a enlitiĝis kun frateto.

~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

Mi ellitiĝis je la kvina, kaj iris al la sanktejo proksima. "Feliĉan novjaron!" Ĉiuj personoj salutas unu la alian kun tutkora ĝojo, tial ke hodiaŭ estas novjaro de la vilaĝanoj. Babilado de paseraro, verdaj arboj, freŝa venteto, kiuj ĉio estas gajiga al mi. Dekan horon mi ekveturis al Nagoja per la biciklo. Post unu horo mi atingis al Macuzakaja. 13-an horon mi estis senbicikle promenanta sur la strato Hirokôji, kaj vizitis kelkajn librejojn, sed tiuj ne havis esperantan legaĵon. 15-an horon mi estis en la parenca hejmo kun la biciklo. 19-an horon mi iris aŭskulti koncerton en la halo de Y. M. C. A. La koncerto estis farata de la studentoj, kiuj partprenis el la tutliceoj en Nogaja. Mi raviĝis pro la muzikoj. 22-an horon mi revenis kaj tuj dormis en parenca salono.

unu la alian は unu aliajn 又は sin reciproke とします。hodiaŭ estas novjaro de は hodiaŭ komenciĝas novjaro por とすべきでせう。kiuj ĉio estas gajiga は kiuj ĉiuj estas gajigaj とした方がよいと思ひます。時間は簡單に je 10-a の如くに書いた方がよいでせう。biciklo の冠詞は要りますまい。atingi は atingi ion ですから atingi Macuzakaja でよいでせう。

en parenca hejmo は ĉe la parenco とする。la koncerto estas farita は la koncerto estis ludata (又は donata) とする。partpreni よりは partopreni が普通です。tutliceoj は tutaj liceoj とする。

raviĝis pro は raviĝis de の方がよく、muziko は單數に用ふべきです。revenis の次に al la parenco を置きます。dormi は眠つてゐる狀態ですから tuj がある以上 enlitiĝis とすべきで enlitiĝis tuj. とすればよいでせう。

Ellitiĝis je 5-a kaj iris al la proksima sanktejo.

"Feliĉan Novjaron!" Ĉiuj personoj salutis sin reciproke kun tutkora ĝojo, tial ke hodiaŭ komenciĝas la novjaro por la vilaĝanoj. Babilado de paseraro, verdaj arboj, freŝa venteto, kiuj ĉiuj estas gajigaj al mi.

Je 10-a ekveturis al Nagoja per biciklo, kaj post unu horo atingis Macuzakaja. Je 13-a estis senbicikle promenanta sur la strato Hirokoĵi, kaj vizitis kelkajn librejojn, sed ili ne havis esperantan legaĵon.

Je 15-a estis ĉe la parenco kun la biciklo.

Je 19-a iris aŭskulti koncerton en la halo de Y. M. C. A. La koncerto estis ludata de la studentoj el la tutaj liceoj. Raviĝis de la muziko.

Je 22-a revenis al la parenco kaj tuj enlitiĝis tie.

前號重要正誤

頁	欄	行	誤	正
102	左	-12	pri kalkulas	prikalkulas
103	右	5	oni 動詞	oni は動詞
105	左	18	ĝojigita と	ĝojigita も
105	左	-8	(=Ŝajnas al mi,	(=Ŝajnas) al mi,
105	左	-8	mi)songâs.	mi songâs.
107	左	20	diferenca	difereucaj
112	右	-7	aŭskultanta o	aŭskultantaro
114		7	asertas	arestas
114		-7	rokoj	sur rokoj
114		-3	samrapide	samrapida
118	左	7	(1904-a)	(1905-a)
118	左	-12	kiei	kiel
119	左	-10	nasiĝkprovincon	naskiĝprovincon

二月號正誤

頁	欄	行	誤	正
42	左	-1	E. A. L. の殘した	E. A. L. の提供した

新刊紹介

★**POEMO DE L' PLUGISTO**, originalo de Ĥ. M. Ĥrima, Serio Liter. No 11, Bibliot. de Sennaciulo; eld. SAT, 23, rue Boyer, Paris (XX); 12×15 cm.; p. 62; prez. 0.60 Mk, 定價30錢（郵2錢）學會在庫。

若き農夫の詩、二十八篇を輯む。燦爛の美はないが極めて平易で讀み易く、詩格も甚だ正確である。例、Knabo kaj Knabino より：

For tri tagoj pasis jam ho,
tamen dolĉaj tagoj tri,
nun ĉiel' kun hela flamo
min rigardas pli kaj pli.
Pri la mondo ŝi rakontas,
kiun regas la scienc'—
mia lango vorti hontas,—
ĝi balbutas pri sensenc'.

★**KRISTANISMO KAJ PATRIOTISMO**, de L. N. Tolstoj, trad. I. Maĉernis, Serio Liter., No 12-13, Bibl. de Sennaciulo: SAT.; 12×15 cm.; p. 111; prez. 1.20 Mk. 定價60錢（郵4錢）學會在庫。

トルストイ伯の基督敎と愛國心に關する意見。共の思想は社會政策上から見ればまことにまゐろき限りであるが兎に角或る意味の先驅者たる伯の意見にも見るべき所はあろう。譯文は上々とは云ひ難いが先づ SAT 發行物としてはよい方である。

Ni gratulas, ke la stilo de SAT-eldonaĵoj, kiu estis laŭ ĝenerala kritiko diabla, pli kaj pli boniĝadas. En la nuna verko ni tamen trovas kelkajn nebonajn difektojn, ekzemple neagrablan senton al ni kaŭzas la tro oftaj uzoj de participaj adverboj. [K. Ossaka]

★**ANSTATAŬA EDZINO**, de Erica Maxwell, trad. el angla M. Sampson; eld. Heroldo de Esp., Köln; 1931; 14×20 cm., p. 212; 並製1圓60錢（郵4錢）、上製2圓40錢（郵6錢）學會在庫。

露國へ行つた藝術家が女から外國へ逃れたいがそれには外國人の妻と云ふことになつて出ないと出られぬからと云ふ依賴に顏も見ぬその女と形式上の結婚屆をしてやる。その女は困つた場合には訪れて來いと貰つた名刺を落し、それをひろつた女書記がそれをもつて件の文學者の許に押しかけて行く……と云つた風に『代理妻』の葛藤は展開する。譯文は惡くはない。

★**國際親善友好團體要覽**、鐵道省國際觀光局出版、1931; 13×18.5 cm.; p. 95.

對一國並に對數國關係の我國に於ける重要國際團體85の目的、事業、創立、機關誌等に就て記述す。エスペラント關係としては我が日本エスペラント學會並に Revuo Orienta 誌に就て述べてゐる。

★**BAHA U'LLAH KAJ LA NOVA EPOKO**, de D-ro J. E. Esselemont, el angla trad. Lidja Zamenhof; Bahaa Esperanto-Eldonejo „Nova Tago," Weinheim; 1930; 15.5×23 cm., p. 191, 定價2圓00（郵6錢）、學會在庫。

故 Esselemont 博士は一方熱烈な Esp. の宣傳家であり又晩年は Bahai 敎に歸依しエス文『バハイ運動の歷史』等を著した。本書は博士の英文遺著を譯したもの。譯者はザメンホフ博士の娘さんたる Lidja さんの筆であるから文章は模範的で流暢である。本書の詳細は本誌三月號 p. 90 に我國に於て十年來バハイ敎の宣傳に從事されつゝある Alexander 孃の紹介記事がある。記者も亦諸讀者に一本を薦める。〔小坂〕

★**LEGU KAJ PAROLU**, Esp. Legolibro, de Julie Ŝupichova; Eldonanto Ŝolca Ŝimaĉek, Praha; 12×18 cm., p. 228.

お伽噺、物語、小說、詩等100篇より成る讀本で中等程度の學習者には好箇の讀み物であろう。

★**PRI LA GENEZO DE LA PAPILO DE NERVO OPTIKA ĈE SUS SCROFA DOMESTICUS**, de Ken Takahaŝi, Embriologia Laboratorio, Medicina Univ. de Okajama, eltiraĵo el „Folia Anatomica Japonica," 1931; 19×27.5, p. 19.

La recenzata scienca laboraĵo pritraktas evoluon de la papilo de nervo optika ĉiufaze observatan ĉe porkembridoj. Presita sur luksa papero kun belaj 20 fotografaĵoj. Tia konstanta laborado de niaj scienculoj-samideanoj tre multe helpas kaj kuraĝigas nian movadon. Estu dankaj por ili.

岡山醫大胎生學研究室の高橋氏の研究論文で此の方面に Esp. を常に用ひられる同志の努力に深甚の敬意を吾人は表する者である。

★**ESPERANTO AS AN INTERNATIONAL FACTOR**, de Lehman Wendell, eltiraĵo el granda verko "Readings in Sociology" de Prof. Wilson D. Wallis kaj M. M. Willey ĉe Univ. de Minesota, eld. Alfr. A. Knopf, New York, 730 Fifth Av.; 15.5×23.5 cm., p. 11.

國際語の發達とエスペラントの現狀を概說してゐる（英文）。

Fundamenta Krestomatio 質疑應答

小坂狷二

★P. 8, l. 9: Se li jam venis, petu lin al mi の petu lin の意を（朝鮮石氏）。

【答】 Petu lin veni al mi=petu lin, ke li venu al mi. 來てお出でならこちらへ御通ししてくれ。

★(a) p. 19, l. —2: Tio ĉi estas ja bonegaj vestoj! (b) p. 20, l. 8: (ili) postuladis la plej delikatan silkon kaj la plej bonan oron. Tion ĉi ili metadis en siajn proprajn poŝojn. (c) p. 20, l. —6: Ĉu ĝi ne estas belega desegno kaj belaj koloroj. 此の tio ĉi, tion ĉi, ĝi が複數になつてゐない理由。

【答】 Zamenhof 曰く：理論のみで考へれば io, tio, kio 等はそれに目的格の語尾をつけ得るごとく複數語尾を付けて悪いと云ふ理屈はないわけではあるが實際の上から見て私は此等を複數形に用ひることはおすゝめしない。それは io, tio, kio 等の語の意味の上から普通複數が考へられぬと云ふまでゞす。卽ち例へば tio は或る一個のものを特示するのでなくて、或るものや事を概括的に概念的に、指し示す（卽ち或る objekto を指示するのでなくて、ある概念の描く bildo を示す）もので從つてそれは一個のものから成立して居ろうと多くのものから成立して居ろうと要するに概念的には一つ bildo であるから常に tio を以て指し示してよい（tioj とする必要がない）。尤も人間の言葉は一率に劃定することは出來ぬのであるから甚だ稀有な特別な場合にはどうしても理論上複數を用ひた方がよいと云ふ樣な場合が起つて來ないとは云へない、勿論その樣な場合には複數形を用ひたとて差支はない。（『リングヴイ・レスポンドイ』p. 46 參照）。

そこに雞、烏、雀など色々な鳥が居るのを指し示す時は概念的に全體を一幅の bildo と考へるのだから

Tio estas koko, korvo, pasero, kolombo kaj hirundo (井上エス讀本 p. 39).

と云へばよい（tioj と云ふ必要はない）。

然し次に言葉をついで此等の鳥が一緒に庭の上で遊んでゐると云ふ時は此等の鳥各個に考へるのであるから今度は『人稱代名詞』を用ひて

Ili ludas kune sur la korto.

とすべきである。

Tio estas miaj hundoj. Ili estas bonaj.

これは私の犬です。（この犬は）いゝ犬です。

こゝが人稱代名詞と指示代名詞との根本相違の點で、卽ち或る事物を先づ人に指して示す場合は概念的であるから指示代名詞を用ひる。これは日本語に『それ、これ』と譯せる。次にそのものを更に示す場合は既に概念をはなれて個々的になるので人稱代名詞を用ひる。日本語では人稱代名詞なるものは用法がない（殊に第三人稱）ので日本語ではかゝるときには名詞をくりかへすか、代名詞を全然用ひない。次の數例を翫味せよ。

Ĉu vi iros? 行くかい。

Jes, mi iros, 行くよ。

Ĉu via patro estas hejme?—Jes, li estas.

お父樣は御在宅ですか。

えゝ、『父は』居ります（又は單に『えゝ居ります』）〔決して『彼は』居りますなど云ふ日本人はない〕。

Ĉu vi jam trovis vian ĉapelon?—Ne, mi ankoraŭ ĝin ne trovis. 帽子はもう見付かりましたか——いゝえ、帽子はまだみつかりません（又は）單に『いゝえ、まだみつかりません』。

扨以上は初等文法としての tio 等の用法であるが質疑の (c) は高等文法に屬すべきもの。

一體世の中の現象は社會經濟でも力學でも principo de minimuma peno (laboro)『骨惜しみ（最小仕事の）原理』に支配される。人間の言葉も亦然りで、Esperanto でも何分にもその人間が使ふのだから常に理論のみで押してはゆけない。いつも云ふ例だが『提燈に火をつけ』てはもえてしまふ、理論的には『提燈の中に立つてゐる』蠟燭の芯の先に火をつける』と云はればならぬ筈だが實際には『提燈に火をつける』で用を辨ずるから理論に外れたこう云ふ簡單語法で御免を蒙つてすませる。前に出た petu lin al mi も前後の關係で petu lin veni al mi と云はなくてもわかるから veni を略してよい。Ili promenis mano en mano. も理論上では Ili promenis kun la mano en la mano とせればならぬが人にわか

れば短いに越したことはないから理論は無視して „mano en mano“ をあだかも『手を携へて』と云ふ副詞の如くに慣用する。Post は『時』『順序』の『の後(アト)に』の意、malantaŭ は場所の『(物)の後(ウシロ)に』の意に用ひるのが常用法であるが一綴の post が三綴の malantaŭ の代りに場所のウシロの意によく代用せられる(長い malantaŭ を post の代りに用ひる物好はない)。post kiam…『…した後』に對して『…する前に、せぬ内に』は antaŭ kiam… を用ひてよい筈 (Grabowski 等用ひた例は勿論ある) であるが人は好んで antaŭ ol… を用ひる。これは前者が四綴であるのに對して後者が三綴で短いからである。是と全く同じわけで二綴の指示代名詞たる tio の代りに一綴の人稱代名詞たる ĝi が代用せられることがある。

本質疑の譯は

(a) これはほんとにすてきな衣物だ。

(b) 彼等は更に良い絹と良い金とを請求してそれを着服した。

註: 此の場合 tion ĉi の代りに ilin を用ひてもよい。然し silko も oro も物質名詞で個々を示すものでない故わざと概念的に tion ĉi を用ひたものであろう。

(c) 美事な模樣、美しい色合ではござりませぬか (ĝi=tio の代用)。

なほ別例二三を

S-ino Snitchey ripetadis al sia edzo, ke se li iam de iu estos kondukita sur malĝustan vojon, ĝi estas per tiu ĉi homo, kaj ke se iu havas malvarman okulon, ĝi estos Craggs. (Batalo de l' Vivo).

ス夫人は夫にいつもこう云ひつゞけた、若し夫がいつか誰かのせいで邪道に足をふみ入れることがあつたとすればそれは (ĝi=tio) 此の男のせいですよ、とか又若し冷淡な奴が居るとすればそれは (ĝi=tio) あのクラッグスの奴ですよと。

Ĝi estis virino, kiu povis havi la aĝon de ĉirkaŭ sesdek jaroj (Marta).

それは (ĝi=tio) 六十代位らしい女であつた。

Ĝi estas vi, kiu ĵus enkondukis la komisiulon. (Georgo Dandin).

使の者を引つ張り込んだのはてめえだ。

★P. 20, l. 12: Mi volas scii, kiom de la ŝtofo ili jam pretigis. の kiom de は kiom da とすべきではないでせうか (同氏)。

【答】 Kiom の次には必ず常に da がつくと思つてはいけない。da がつくのはその前行の語が數、量を計る升のような單位的の意となつて da の次の語の數、量 (その語が普通名詞ならば數、物質名詞ならば量) を示す場合のみで、その他の場合には他の前置詞、例へばその一部分を示す場合には de を用ふべきである。

La libro kostas duonon da marko.

marko と云ふ價格を duono と云ふ單位の升で計つて 1 duono だけ取り出した意で da を用ひる。此の本は半マルクする。

Donu al mi duonon de via mono.

貴樣の持つてゐる金の半分をよこせ。これは duono を單位にして數量を計る場合ではなく貴樣の持つてゐる金の半分と云ふ部分を云ふのであるから de. 丁度貴樣の外套の一部分たる兩袖をよこせ Donu al mi la manikojn de via supervesto と云ふのと同じことである。卽ち da は『數、量』と云つても前行語を以て單位として後續語の數、量を計つて示す必要ある場合のみに限るので從つて此の場合後續語は特定のものであり得ない、卽ち不定のものであることが多い。後續語が特定の場合は自然そのものゝ部分を指すことゝなるから de を用ふべきことが多い。

Li aĉetis du metrojn da ŝtofo. 反物を二メートル(だけの分量)買つた。

Tiu parto de la ŝtofo estas tre bela. その反物のこの部分は美しい。

Tri estas duono de ses. 六の半分 (6 を duono で計る意でなく、6 の $\frac{1}{2}$ なる部分の意)は三である。

Kiom da ŝtofo vi aĉetis? どの位反物を買つたか。

Kiom de la ŝtofo (Kiom da kvanto de la ŝtofo) estis pretigita? その反物がどの位出來上つたか。

最後の例ではその反物の『分量のいか程』がと云ふ da kvanto が略されてゐるものと考へればよい。

Ĉu vi scias la nombron de la studentoj de tiu ĉi lernejo? 學生の數(玆に nombro は學生の數量をはかる意でない故 de) を知つてゐるか。

Nombro da studentoj promenis sur la strato. 學生が何人か(こゝでは nombro は『何人か』と學生の數を示すに用ひられてゐる故 da) 散歩してゐた。

なほ Zamenhof 博士曰く: 例へば monato は單に數量 (時の量) を示すのであるから Monato estas parto da tempo と云へるが Januaro は數量の意味はなく特定の限定されたるものを示すのであるから Januaro estas parto de jaro (一年の一部) と云ふべきであろう。(なほ詳細は『リングヴァイ・レスポンドイ』 p. 63 參照)。

語 學 日 誌

川 崎 直 一

實際にこんな日誌を毎日つけてゐるわけでわない。もちろん讀書のさい面白いと氣のついたことや、他人の說に對する自分の意見などをその本自身の中に書いてわある。集會、會話などでの收獲わたいてい頭の中にしまつておくのであるが、ややもするこ忘れてしまう。こんな語學日誌をつけておいたら、後で參照する便利にもなるし、また自分の思想の發達史にもなるこ思うのであるが、ずぼらな性質だからなかなか實行ができない。ここにのせたものわ、とくにこれだけ後から思いだして日誌の體裁にしたのである。けれども時日こ其出來事わ歷史的のものでけつして急に勝手にこしらえあげたものでない。

3月17日 大阪エスペラント會の例會に出席。例によつて **Fundamenta Krestomatio** の輪講あり。p. 267, l.-3 の 'priskribo' が parolado の場合のものとして使われたのでないかと考える。その場で SAT, **Plena Vortaro** をひく。'…aŭdanto aŭ leganto…' とちやんと aŭdanto がはいつている。この字引めなかなかやつてるな！と思う。

3月25日 堺の Esperantisto 栗栖さんがやつてこられた。『あなたわ「**愛ある處神あり**」のような斷片的なものでなく、もつとまとまつたものを書かれたらどうか』と云われる。福田國太郎氏もこれに似たことを言われた。「註釋にせず、字書の硏究といつたようなものに……」と、しかし私わ思う。註釋のような體裁なら、その文中に出て來る問題だけかたずければよい。少い問題に精力を集中することができる。字引の硏究とか、まとまつた文法とかになれば A—Z まで全部やらればならない。私のような貧弱な知識と劣等な勞働力のものにわそんな大きな仕事わとても出來ない。問題を一つずつぼつぼつ片ずけてゆきたい。先人の硏究を批評しつつ、たとい一歩でも自分の新しい硏究に加えることが出來れば幸いである。短刀直入偉大な體系をパッ卜示すようなことわ私にわとてもできない。

3月26日 朝飯の膳の上に待ち兼れていた「**プロ・エス講座**」の第四卷がある。二時間あまりでしまいまで讀む。'前書き' に 'こゝに出來上つたものは高等といふ程度のものではない。基礎的な文法の硏究からわずかに一歩踏み出したに過ぎず……' とあるが從來の本に書いてない meditiga な意見がだいぶある。p. 70 の mal- ne- sen- のごとき言語觀念と文法形式の相互關係の問題としてたしかにつつこんで考えて見るべきものである。其他私に參考になつたのわ：間投詞、疑聲、動詞について、動詞のもつ時間の長さについて、devi, povi, voli と infinitivo, sinjorino, 發音のきれ工合、日本人と軟い音、文字の書き方など。

4月4日 Drezen から手紙。「愛ある……」で彼の **Zamenhof** を批評した。この本をやつたらよいのだが、費用のでどころがないので、赤インキでうんと直してある校正刷 D. の本のところだけ）を送つてやつた。それの返事である。その中に近く彼わ aglutina（膠着語）の理論で Esp.-gramatiko を書くとある Varankin, **Teorio** が fleksia（屈折語）で書いてあるのでその opozicio として。こんな文法書は日本人あたりからでそうなものであると思つていたのだが。

4月10日 Kirchhübel とかゆう知らない人から郵便が來た。あけて見ると「あなたわ Göhl が 1 月に死んだ事をまだ知らないのだろう、自分わ Göhl の友人で、あなたが Göhl に出した手紙を Vidvino から渡された……」とある。「**愛ある**……」で Göhl の編纂した **Demandaro pri la historio, literaturo kaj organizaĵoj de Esp. por Esp.-aj Ekzamenoj** を紹介したので、そこのところの校正刷を送り、更に其の書に對する私の希望（indekso をつけよ、ktp.）をいつてやつたのである。も少し早く手紙を送つたらよかつたと殘念に思う、K. の手紙の中にわさらにつぎのことがある。「…Sian plej gravan verkon "Ausführliche Sprachlehre" li finskribis post 8-jara seninterrompa laboro kaj forsendis la lastajn foliojn de la manuskripto nur 3 tagojn antaŭ sia morto al la eldonisto. Ĝi nun fine estas presata, sed la mortinto bedaŭrinde ne povas ĝui la fruktojn de sia pena laboro…」ごくわづか一部分が Esp.-Praktiko に載つた事がある。私が Esp. をやりはじめて間もなく此の本の豫告を見て、それから數年間待ち兼れていたもので、それでいつたいいつ出すんだと聞いたのである。

續 他 山 の 石

17. 卷煙草に火をつける。

Ekbruligi cigaredon.

蠟燭をともす。ekbruligi kandelon.

タバコを吸付ける。ekbruligi pipon (da tabako).

18. 鼻たらし小僧。

Malsekorela bubo.

實は耳だれで耳を年中ぬらしてゐる小僧のこと。但し malseknaza bubo としても通じよう。序乍ら nazo に關する句二三:

Amerikaninoj parolas **tra la nazo.** 米國の女は聲が鼻にかゝる。

Purigi la nazon. 鼻をかむ。

Ne ŝovu la nazon en fremdan vazon (Proverbaro Esp.) 餘計な他人のお狹趾(せつかい)をするな。

Mi **havis bonan nazon** (Geor. Dandin). おれは感がよかつた(すぐ事を嗅ぎ當てた)。

Li **faris longan nazon.** がつかりしてポカンとしてゐた(當が外れてがつかりしてゐる顏付の形容)。

Ili devis foriri **kun longa nazo** (Rabistoj, p. 18). 奴等は悄然として去らねばならなかつた。

19. 何か彼女に耳打をした。

Li flustris (aŭ diris) al ŝi ion en la orelon.

彼は私の顏をのぞき込んだ。

Li rigardis al mi en la vizaĝon (aŭ en la okulojn).

20. 彼はそんな仕事にはお誂へ向きの人だ。

Li estas **la ĝusta** homo **por** la laboro.

21. カンラカンラと打ち笑ふ。

rid(eg)i **el la tuta gorĝo.**

聲を限りに叫ぶ。 krii el la tuta gorĝo.

22. 勝鬨。 venka kriado.

悲鳴。vekrio.

23. 南山を占領し時を移さず(時期を失せず)旅順に向つた。

Ni ekokupis Nanŝan, kaj tuj almilitis al Porto Arturo, **dum la fero estas ankoraŭ varmega.**

Forĝu feron, dum ĝi estas varmega (Proverbaro Esp.).

善は急げ(鐵を鍛へるにはそれが熱い中にやれ;物事は時期を失はぬ內に手早くやれと云ふ諺)。

24. いやいやそんな筈はない。

Ne, ne! Tio **ne povas**=Estas ne eble.

『有り能はぬ』は卽ち『ある筈がない』。

Li ne estas freneza. 氣狂ではない。
Li ne povas esti freneza. 氣狂であろう筈がない。

『有り得る』は『有るかも知れぬ』。

Li estas freneza. 氣狂です。
Li povas esti freneza. 氣狂であるかも知れぬて。

『あるべきである』は『あるに相違ない』。

Li devas esti freneza. 氣狂に相違ない。

25. 貧乏したのであんなに調子が變つて來たのだ。

La mizero lin tiel **agordis.**

akordi (調諧音が互に)調和する、(音調がよく)合ふ、(意志がよく合つて)和合する。
agordi (絃樂器などの絃の) 調子を合はせる、整調する。

26. 犬を怒らせる。

inciti hundon.

Li incitis al mi la galon.

あいつ癪にさわることを云ひ居つた。

ekscititi (神經を)刺戟する、興奮さす、(人心を)騷がす。
inciti (感情を)激さす、怒らす、そゝる。

27. 一生懸命に逃げた。

Mi forkuris **per ĉiuj fortoj.**

per ĉiuj fortoj=per sia tuta povo=kiel li nur povis 一生懸命に、出來る限り(を盡して)。

Venu kiel eble pli (aŭ plej) frue. 出來るだけ(成るべく)早く御出向き下さい。

Mi laboris per mia tuta povo. 力の限りやつてみました。

英語の世界語化難

粟飯原　晋

62. 單語五百の英語

英語の語數が幾何あるかは知らないが、スタンダード辭典には三十萬以上あり、センチュリー辭典には二十二萬五千あるといふ。而して此の中實際使用のものは三萬を出でず、文豪シエクスピーアは其の著作の全部に於て約一萬五千語を用ひ、ミルトンの使用語はその約半數に過ぎず、高等教育を受けた者の知つてゐる語數は多くとも五千語で、普通の者は約二三千語を用ひてゐるに過ぎない。處が約五百語の基礎單語を撰定し、無暗に多い言葉を淘汰して英語の學習を簡易化し、之を世界語になさんとする運動が起つてゐる。

此の單語五百を基本とする英語は "panoptic English" (ひと目で見える英語)と稱されてゐる。蓋し一葉の紙片に五百語を全部記し、一目瞭然たり得ることを謳つた名稱であらう。この單語五百の英語では動詞は come, get, give, go, keep, let, make, put, take, be, do 及び have の十二個丈けで、人や事物の動作は以上の十二の動詞で全部まに合はせる。こんな調子で頗る簡單に出來てゐるので、數年かゝつても覺え切れない英語が、數週間で役に立つ樣になるとか。次に例文を揭げよう。

The mirror dispached to the cinema sustained serious damage through falling after disembarkation. Kindly attend to this matter. これを "panoptic English" で書き直すと、The looking-glass on the way to the motion picture house had a fall after getting off the ship and is badly broken. Please give this your attention. となるのである。英語國に於て無學無識の徒は三百の英單語を以て、彼等の思想を充分に表現してゐるそうであるが、五百の英單語を以て『國際語』たらしめんとすることは、世界の人々を餘りに甘く見た話ではないか。

63. 「アングリツク」

英語の綴字のむつかしく、不合理なものの多いことは、此の國語を學ぶ者の誰しも氣付くことである。既に 1560 年頃エリザベス女王時代に大法官 Thomas Smith が綴字改正を企てたことがあり、これ以來約七十種の綴字改正案が考案せられたが、何れも改革に急にして、徒らに發音主義に依り文字の傳統を顧みなかつたので失敗に終つた。處が近頃スエーデン・ウプサラ大學英語教授 R. E. Zachrisson 氏の提唱せる "Anglic" と稱する改良綴字の英語は相當多くの贊成者を得、ウプサラにアングリツク協會を設け、機關雜誌も刊行さるゝに至つてゐる。

ザツハリン教授は今迄の研究者とは行き方を異にして、五百種の違つた書き方で表はされてゐる四十二個の英語の音を學術的に研究し、是等の音を表すに最も多く使用されてゐる綴字を統計的に調査した。その結果、例へば、"ai" といふ音は大部分 "ie" と綴られてゐることが判つた。依つて "ai" なる音は、『アングリツク』では "ie" で表す。卽ち Friday は Friedoe, ride は ried, buy は bie, right は riet, height は hiet, like は liek 等となり、かくて此の例の場合丈けでも、十八個の異つた綴字法が一個で表はされることになるのである。

ザツハリン教授の下に集つた學生は、九十分宛の授業を二十回にして何れも『アングリツク』の讀み書きが自由自在になつたとか。兎に角同教授の綴字改良は英國の簡易綴字協會、米國の綴字改良協會の目的と一致するものであるから、うまく行けば相當成功をするに違ひない。然かも英米の兩協會はザ教授を支持して居り、英國の Daniel Jones, Walter Ripman, Lord Cecil, Gilbert Murray. 米國の Grandgent, Dewey, Kropp 等の諸學者、政治家等が贊意を表してゐるのである。しかし、英語綴字の合理化に依つて、同語の國際語としての機能を發揮せしめんとする『アングリツク』案も畢竟するに、英語を世界語にせんとする果かない試みの一に過ぎない。

新 綠 漫 談

大 野 雅 夫

我々が現に使用してゐる kartoj は numeral といふ種類に屬するので、その初の模様は心臓、鈴、木の葉、團栗の四種類であり、また伊太利、西班牙等に行はれたのは劍、洋盃、棍棒、貨幣の四種類であつたさうだ。それが十五六世紀頃から今我々の手にある様なハート、ダイヤ、クラブ、スペートの四種類になつた。ハートは洋盃の變形で僧侶の象徵ダイヤは貨幣の變形で商業の象徵、クラブは棍棒の變形で農業の象徵、スペートは劍の變形で軍閥五侯の象徵であつた。これは多く佛蘭西に行はれた kartoj で、シャルル七世の御宇 1435 年頃初つたものの由。

英國の kartoj の印はもと佛蘭式によつたもので、名稱は伊太利、西班牙式をも加味して、三葉のついた札を伊西式の棍棒にあたるといふので club (塊、棍棒) と稱し、スコッパの尖の樣な印のついた札を伊西式の劍 spada にあたるといふので spade とした。

さてこれ等を Esp. では Kero (<F. cœur =koro), Karoo (<F. carreau = diamanto), trefo (<F. trèfle = Eng. trefoil, clover-leaf) piko (<F. pique=spado; Eng. pike) とよんでゐる。Esp. は名稱をもそつくり本場の佛蘭西からぢかに輸入して、そのまゝ使用してゐるのだから、英語にみる奇異なごたまぜがなく、印と名稱とが合致してゐる。

piko はまた ŝpato ともいはれる。ŝpato は spade (<spada) から出てゐるのだが Esp. では劍の方は別に spado といつてゐる。kero, koro はもと同根の語である。F. trèfle, Eng. trefoil は trifolio の意で、我國ではおらんだげんげ、普通クロヴアーといつてゐる。棍棒は Esp. で klabo であるが klubo (倶樂部) といふのも同根で、Eng. club を二つに書きわけただけだ。元來 Eng. club には塊、棍棒の意と倶樂部 (a clumpe of people) といふ意との二つがある。

俗に醜女をスベタといふのはやはり kartoj のスペートから來てゐる。その反對に美しい女をドロピイといふ言葉があるが (今ならシヤンといふところ、シヤンは獨逸語の schön の轉訛だといふ者もあるが、花の都巴里は公園シヤンゼリゼー champs-slysees のシヤン champs をとつて、そこをシヤナリと逍遙する妖艶な女達を意味したのが初りだといふ說もある。)これはビイドロ(硝子)を倒さにしたやうに美しいといふのださうだ。我國で古くからビイドロといふ言葉が使はれたが、もとはポルトガル語だそうである。Esp. でも vitro である。

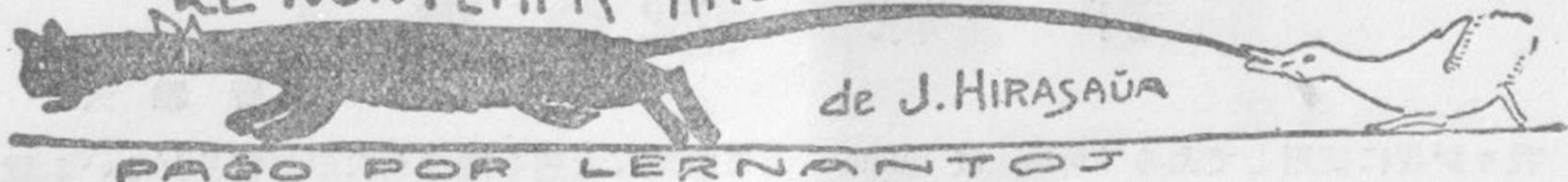
若い我々の間の漫談はとかく virino に關聯する。まじめな女性觀、戀愛論が女連の噂話と變じ、終には○談へ墮ちてしまつたりする。沙翁の Malforto! via nom' estas; virino! Hamleto I, ii. はあまりに有名な臺詞だ。feminismo といふ說は L. femina (=virino) から來てゐるのだが malleus malificarum (1520) といふ本には fe(faith = fideleco)+minus (=pli malmulta) と說明してあるさうだ。feministino から怒られるか知らん。

Latine: minus からはいろいろな語が derivi されてゐる。ministro (元の意味は servanto; min-es-ter, min (minus=malgranda), minuso (マイナス), miniaturo (微細畫、縮圖), minueto (ムニユエ舞踏), minuto (分), minora (短音の; majora に對す), minimumo (最小限、maksimumo に對す), minusvaluto (減額)、それから接頭字の mis (誤 mes) もやはり同樣。

viro の出所は L. vis (forto, vigoro) の複數 vires. 女性の接尾字 in がまた不思議に陰(女は陰氣をうけてかくるるを性とするといふ支那思想) と koincidi してゐるではないか。

kartoj の女王は damo といつてゐる。L. dominus(=lordo) の女性 domina (=sinjorino) が F. dames をへて Eng. dame (夫人、刀自) dam (母獸、輕蔑的に母親) となり Esp. damo となつたものである。聖母マリアの madono も Ital. madonna (Eng. mia sinjorino) から來てゐるがそのもとは L. domina である。madame (=sinjorino) といふのも madonna の詰つたものだといふ。また madonna は訛つて monna (モナリザのモナ) となり、これが更に猿の意となり、人の子ならぬ monkey を生むに至らうとは!

〔記者曰く〕 因に kartoj のキングは reĝo, ジヤツクは bubo, 切札は atuto, 一 (ポイント) は aso.



KIU NE VOLAS RICEVI 100,000 ENOJN ?

Post la malsukceso de transpacifika flugado de s-ro Bromely, la ĉielo de la Pacifika Oceano estas en la mondo la sola, kiu restas virga, nekonkerita de aeroplano. Por rapidigi la efektivigon de la flugado granda ĵurnalo "Asahi" deklaris, ke ĝi donacos 100,000 enojn al la unua japana sukcesinto de la flugado. Kiam la sukceso estos atingita ne de japanoj ili donacos 50,000 enojn.

La reguloj estas:

Nur aeroplano povas esti uzata;

Ne devas surteriĝi (aŭ surakviĝi) survoje;

La nombro de personoj en la aeroplano ne estas limigita;

De kiu ajn flanko (de Japanujo aŭ Usono) povas esti komencata la flugado.

RADIO-DISAŬDIGO EL USONO

Radio-Stacio de Nov-Jorko informis al Kemigaŭa Radio Stacio, Japanujo, ke ili volas fari gratulan disaŭdigon okaze de la naskiĝtago de Lia Imperiestra Majesteco. La programo konsistos el salutoj, "Kimigajo," nacia himno Japana, kaj ceteraj muzikaĵoj. Kemigaŭa-Radio-Stacio tuj raportis la aferon al la Ministrejo de Komunikado kaj faras energian preparon kun ĉiuj fortoj.

Se la vetero kaj aliaj kondiĉoj permesos en tiu tago, la disaŭdigo estos transsendota al ĉiuj sendostacioj por disaŭdigi tra la tuta Japanujo.

KARTO DE FELIĈO

Lastatempe la modo de "karto de feliĉo" disvastiĝis tra Japanujo. La karto ne nur ĝenas la ricevinton, sed ĝi alportas grandan perdon entute. Post longa konsiliĝo Sekcio pri Publika Sekureco de Metropola Polica Oficejo decidis severe kontroli la aferon kaj avertis al la publiko, ke kiam ili ricevas tian karton tuj informu al la plej proksima polica oficejo.

Japana Esperanto-Instituto ankaŭ ricevis informon pri Esperanta feliĉa karto. Certe tia fakto evidente montras la vastiĝon de Esperantujo.

DU SAMIDEANOJ PERDIS VIVON

Por pasigi libertempon 18 studentoj de la liceo de Tokio Normala Kolegio iris al Monto "Kinpoku" sur insulo "Sado" (sur Japana Maro) sub la gvido de profesoro C. Nakajama.

Ili forlasis hotelon Marukane en Rjocu apud Kinpoku je la 6-a matene, la unuan de aprilo. Je la 8-a, dungante 2 montgvidistojn, ili komencis supreniri la monton de vilaĝo Kanazaŭa. Survoje ili jam sintrovis en densa nebulo kaj estis decidite tuj malsupreniri. Gvidistoj la unuaj forlasis la monton kaj poste oni jam havis nenian sciigon pri la studentoj. En vilaĝo Kanazaŭa taĉmento por la serĉado tuj estis kolektita el vilaĝanoj kaj fajrestinga trupo, kiu konsistas el 30 personoj kaj supreniris la monton je la sepa matene de la sekvinta tago.

Post vojiro de ĉ. 8 kilometroj ili trovis 14 studentojn, inter kiuj 2 estis mortintaj, du grave vunditaj pro frosto kaj ceteraj 7 ankaŭ ne havis konscion. Ambaŭ mortintoj estis unuj el la plej energiaj batalantoj por nia sankta ideo en la liceo. Okaze de la funebra ceremonio aranĝita la 18-an de tiu ĉi monato en aŭditorio de la liceo, Japana Esperanto-Instituto sendis sian plej sinceran kondolencon.

〔懸賞金拾萬圓〕 **transpacifika flugado** 太平洋横断飛行。**deklari** 公表す。**sur'ter'iĝi** 着陸す

〔米國よりのラヂオ放送〕 **gratula dis'aŭd'igo** 祝賀放送。**okaze de ～** ～の機會に。**Ministrejo de Komunikado** 遞信省。**faras energian ～** 準備に大童になつてゐる。

〔幸福の手紙〕 **modo** 流行。**Sekcio pri Publika Sekureco de ～** 警視廳保安課。

〔二同志の死〕 **libertempo** 休暇。**montgvidanto** 强力。**fajrestinga trupo** 消防隊。**ne**

UNIVERSALA KONGRESO DE BLINDULOJ

La 13-an de marto, unuafoje post la granda milito, oni havis Universalan Kongreson de Blinduloj en Pensilvania Hotelo, Nov-Jorko, kun la ĉeesto de reprezentantoj el 35 landoj de la mondo.

La 13-an vespere oni havis bonvenan kunsidon de Internacia Domo de Nov-Jorko. S-ino D-ino Helen Keller, kiu estas blinda kaj surda-muta, tute ekster la senta mondo, havis bonegan saluton, kiun ĉiuj atendis senpacience.

La 16-an, s-ro U. Akiba, estro de Tokio Lernejo de blinduloj raportos pri la stato de japanaj blinduloj.

4 PRIŜTELITAJ EN VAGONARO

4 personoj enkalkulante unu fremdulinon, kies nomo estas s-ino James Carler, estis prirabitaj 450 enojn dum la dormado en la unua-kaj duaklasa litvagonoj de ekspreso 17-a, kiu forlasis Tokion al Kobe la sabaton vespere je 21.25. Tri aliaj pasaĝeroj, el kiuj du estis virinoj, ankaŭ raportis al la fervoja polico, ke ilia mansako kaj poŝoj estis malordigitaj de iu, kvankam neniu el ili estis priŝtelitaj.

La ŝtelisto estis malkovrita je 1.50, lundon, iom post la forlaso de Ŝizuoka, kiam s-ro C. Sakagami, pasaĝero en litvagono 9-a, informis al portisto, ke iu tuŝis lian monujon. La monujo estis enmetita en alian poŝon, tamen nenio estis perdita.

La portistoj diris, ke ili vidis suspektindan figuron paŝanta tra la litvagonoj.

MILITA AEROPLANO ATINGIS NOVAN REKORDON

Dairen, 17/IV, Peza aeroplano por bombarbado n-ro 107, unu el la 4 militaj aeroplanoj, kiuj forlasis Hamamacu tiun ĉi matenon, surteriĝis ĉi tie je 17-27, sukcese kompletiginte la senhaltan flugadon, de longa distanco.

La peza aeroplano por bombarbado konkeris la distancon de 1,600 kilometroj inter Hamamacu kaj Dairen en 12 horoj kaj 22 minutoj. Tio estas nova rekordo por longdistanca flugado de japanaj militaj aeroplanoj.

DU NOVAJ INVENTAĴOJ

D-ro J. Kato, profesoro de Tokio Teknologia Instituto, kompletigis du novajn inventaĵojn, nome izolado de kupro kaj ĥemia preparado de mangano duoksida kaj elvokis grandan sensacion en la elektro-ĥemia rondo.

Ĝis nun por izoli kupran fadenon, gumo, ebonito kaj silko estis uzataj sed la doktoro post longa kunlaborado kun docento Hajami, trovis la plej simplan metodon por fari izolilon, kiu estas malpeza, senŝanĝa je varmo kaj tempo.

La metodo konsistas nur en tio, ke en mallumo oni ŝmiras alkalian katalizilon sur la surfaco de kupro kaj kovras la surfacon per kupriko oksida.

Kaj nun la metodo altiras atenton de ĉiuj flankoj en elektra rondo.

La doktoro ankaŭ post kunlaborado kun s-ro T. Macuŝima kompletigis ĥemian preparmetodon de mangano duoksida. Je la duono de la kosto, kiun ĝis nun oni bezonis por fari mangano duoksidan, oni povas abunde fari manganon duoksidan pli bonan, ol la importitan el aliaj landoj.

Mangano duoksida estas necesa por la fabrikado de seka baterio kaj fermetalurgio. Sed lastatempe, jaro post jaro la produktkvanto pli kaj pli malgrandiĝis. Sekve tiu ĉi nova inventaĵo estas rigardata kun granda miro.

La metodo de la doktoro estas; Oni kalcinas manganon karbonatan je 500° kaj forigas karbonon duoksidan, poste oni aldonas iom da alkalio kaj ankoraŭfoje kalcinas en aero je 200° kaj mangano duoksida estas preparita. Per tiu ĉi mangano duoksida oni povas plialtigi la tension de seka baterio je 30%.

---

havis～ 意識を失つてゐた。 **kondolenco** 弔辭。

〔萬國盲人大會〕

〔二つの發明〕 **izolado** 絶縁。**mangano duoksida** 二酸化マンガン。 **sensacio** センセイション。**docento** 講師。**alkalia katalizilo** アルカリ性觸媒。**kupriko oksida** 過酸化銅。**metalurgio** 冶金。 **fermetalurgio** 製鐵。 **kalcini** 煆く。**mangano karbonata** 炭酸マンガン。**seka baterio** 乾電池。

PERSEKUTO

de Oošita Utaĵi
tadukita de Ŝ. Minami

Vidinte, ke la sangŝmirita kadavro kuŝanta sur la planko jam eĉ ne movetas, juna medicina licenciato, Ĵunkiĉi Sasajama iris malrapide al la kuirejo. Li turnis la kranon de akvokondukilo; akvo elŝprucis tre forte. Li lasis eniri akvon en sitelon, kiu ĝuste sin trovis tie, kaj li lavis siajn manojn makulitajn de l' sango.

Ankaŭ sur surtuto estis kelkaj sangmakuloj, kiuj ŝajne estis makulitaj okaze de la interbatalo. Li multfoje forlavis ilin per pura akvo kaj fine li rigardis en la spegulon, kiu pendis sur kolono tie kaj zorge kombis al si la harojn.

Subite li atente ekaŭskultis; regis peza silento en la domo. Nur de malproksime aŭdiĝis sono de tramo kaj radio-dramo de J. O. A. K. (Radio-stacio en Tokio) ŝajne de najbara domo.

—Nun estas duono post la.... Ne ne, ŝajnas, ke ĵus batis la naŭa.— Tiel Ĵunkiĉi murmuretis.

Estis antaŭ dekkvin-ses minutoj, kiam li vizitis tiun ĉi domon kun la intenco mortigi Keisaku Nomizo, kaj li plene atingis la celon.

Al li ŝajnis, kvazaŭ tio estus nekredinda, ke tiel rapide li finis sukcese la teruran agon, mortigon. Nun restas aranĝo kaŝi la faritan krimon, sed en lia kapo estas klare la ordo por tio.

Li volis fari tiel....unue lasi intence la teruran ilon sur ia loko, due disordigi la enhavajon de la murŝranko kaj de la komodo, kaj ankaŭ meti la ĉambron en kiel eble plej malordan staton, ne postlasi iajn siajn propraĵojn. Tiamaniere li povos trompi homojn, kiuj kredos, ke la krimo estas farita de rabisto senprudenta.

—Hm, la afero sukcesis pli facile ol mi supozis—Ĵunkiĉi revenis al la ĉambro, kie la terura krimo estis farita.

La penso mortigi Nomizo-Keisaku'n jam estis naskiĝinta al Ĵunkiĉi Sasajama en la kapo, kiam li estis ankoraŭ knabo.

Kompreneble en knabeco, li ne havis difinitan ideon lin mortigi, sed tamen li havis eksterordinalan malamon kontraŭ li, kaj ĝi pli kaj pli kreskis ĝis tia grado, ke li fine lin mortigis.

Rememorante la pasintan tempon li ekrimarkis, ke li preskaŭ forgesis la vizaĝon de siaj amikoj el la elementlernejo. Li vane penis rememori, kun kiu li estis en la sama klaso, sed li ne povis forgesi ĉion pri Keisaku Nomizo de 11-a lerneja tempo.

Keiĉjo—tiam Keisaku estis nomata. Por superi Keiĉjon, Ĵunkiĉi diligente lernadis en vivoferanta penado, de la elementa lernejo ĝis la universitato. Kaj de kiam ili estis gradiiĝontaj ĉe la universitato, ili faris profundan batalon por amo, kaj malfeliĉe Ĵunkiĉi estis venkita.

Ĝuste tiam venis al li en la kapon ideo lin mortigi. Dume Keisaku Nomizo akiris la gradon de doktoro pli frue ol li.

Ambaŭ en amo kaj honoro li estis venkita de li.

Kiamaniere mi mortigu lin? Por mi, medicinisto, venenmortigo estas la plej facila, sed la mondo bone scias pri nia malpaciĝo.

Se mi venenmortigos lin, oni facile min suspektos, ĉar mi estas medicinisto. Plej bone estus aranĝi trompan ŝajnigon, ke lin mortigis rabisto. Tamen por tio mi devas atendi ĝis venos bona ŝanco.—Tiel Ĵunkiĉi pensis. Baldaŭ venis tre bona ŝanco.

Keisaku Nomizo loĝis en simpla kaj komforta domo ekster la urbo, kaj li ĉiutage iradis al granda hospitalo, kie li okupiĝis kiel kuracisto.

Foje lia edzino vizitis sian gepatran domon kun siaj servistino kaj infanoj. La edzino ne revenis hejmen en la daŭro de du-tri tagoj kaj Keisaku sola restis hejme. Eksciinte la fakton, Ĵunkiĉi vizitis Nomizo kvazaŭ li faris hazarde, kaj li efektivigis sian teruran projekton.

Kiam Ĵunkiĉi venis sur la homoplenan straton sur kiu estas tramvojo, malproksiman pli ol duon-kilometron de la domo de Keisaku Nomizo, li jam sin tenis tute trankvile.

La ĉapelon li ŝovis bone sur la kapon, li iris kun koltuko varme volvita ĉirkaŭ la kolo kaj kun la palto bone butonumita.

Sed nature, li havis pli malpli da maltrankvileco, antaŭ ol li venis ĉi tien sur la strategon, elirinte ŝtele el la domo de Keisaku.

Li penadis por kaŝi ĉiajn postesignojn de l' krimo kun plej zorgoplena atento tie, kie la krimo estis farita, ĉar li antaŭe preparis por tio, tamen li timis, ĉu najbaro ne vidus lian vizaĝon. Sed baldaŭ li povis trapasi la danĝeran limon, kaj li jam povis fariĝi tute trankvila.

Ĝuste tiam oni havis jarfinan vendadon de diversaj komercaĵoj kaj strato estis vigla kaj homoplena. Amasoj da pasantoj plenplenigis la trotuaron kaj el magazenoj elfluis gajaj melodioj de muzikbandoj. Ĵunkiĉi sin direktis al tramhaltejo. Li fariĝis iom post iom pli gaja, dum li paŝadis en la amuzanta atmosfero.

—Neniu ŝajnas scii, kiel teruran agon mi ĵus faris.

Ĉiuj promenantoj kun mieno indiferenta iradis, rigardadis montrofenestrojn de magazenoj kaj marĉandadis ĉe vespera vendstabloj de malnovaj libroj.

—Vi ja estas ĉiuj malsaĝaj! Certe vi ne scias, kion mi ĵus faris, tiel li diris en si.

Li eĉ fariĝis iom fiera. Li envagoniĝis. Kiam la tramo jam pasis ĉirkaŭ 7 aŭ 8 haltejojn, li subite rimarkis, ke iu stranga rigardo estas fikse direktita al lia vango. Certe iu kaŝe rigardas sur lian vangon. Ĵunkiĉi sentis sin maltrankvila.

—Ĉu sango estas sur mia vango aŭ sur orelo? Ne, ne povas esti tiel, ĉar mi tiel zorgeme forlavis sangon. Kiu do rigardas min tiel atente? Kial?

Kun ĉiuj fortoj li penadis forigi el la kapo la subite naskiĝantan maltrankvilon, rekte rigardante tra la fenestro la eksteron viglan okaze de la jarfino.

Estas tre facile vidi, kiu ĵetas al li strangan rigardon. Sed ŝajnis al li, ke tio iel estas tre malbona. Li penis imagi al si, ke ekzistas tie neniu tia kaj la maltrankvilo certe venas de lia malkuraĝeco.

Li rigardis rekten sen moveto, kvazaŭ li estus pupo, dum la tramo pasis du haltejojn. Sed baldaŭ li malpacienciĝis. Tuj detruiĝo, se li sin turnos! Subite lian kapon trapasis tia timo, sed fine li ne povis deteni kaj sin turnis....

Ha! Jen li ekkriis, kvazaŭ la voĉo estus dispremita interne de la gorĝo. (*daŭrigota*)

La familio de ŝia edzo ne estis tiel riĉa, kiel ŝi antaŭe supozis. Fariĝinte ano de la familio ŝi unuafoje konvinkiĝis, ke ĝi havas nenion krom ĉiutage pligrandiĝanta ŝuldo.

Kvankam per la helpo de plia ŝuldado la familio apenaŭ povis ordigi la eksteraĵon ĝis ĉirkaŭ la tempo, kiam ŝi edziniĝis; de tiam la familio jam neniel povis serĉi monrimedon. Tial Mijoko malsaniĝis pro malriĉeco kaj laciĝis pro fleado, krom tio ŝi estis daŭre turmentata de la bopatrino, kiu havis altfierecon malgraŭ la malriĉeco.

Post forlaso de la hejmo, ŝi denove laboradis kiel flegistino. "Pro kio mi, kiu fariĝis tiel malbela, povas havi la esperon fariĝi vidvino de riĉulo!" Ŝi aspiris fariĝi libera virino dank'al laborado.

Libero! Tamen kia granda distanco ekzistas inter la liberoj, kiun ŝi aspiris en la tagoj, kiam ŝi ankoraŭ havis brilecon pro juneco, kaj kiun nun ŝi volas post malfortiĝo?

"Mi ne serĉas agrablan kaj helaspektan liberon. Mi aspiras nur tian liberon, kiu al mi ne devigas labori kiam mi ne volas."

Ŝi ĉiam tusante sin rapidigis por fariĝi "Libera Virino" per la honorario, kiun ŝi gajnis per flegado de malsanaj homoj. Ŝi klopodis deponi en sia poŝtoficeja ŝparkaso kiel eble plej multe, ŝparante monon, kiun ŝi

ricevis kiel rekompencon de sia farita laboro.

Tamen nenie ekzistis tiu, kiu donis al ŝi pagon sufiĉe por ŝia laboro. Ŝi klinadis humile sian kapon por ricevi tagajn salajrojn de la malsanuloj, kiujn ŝi flegadis pliiginte sian malsanon. Ŝi esprimadis al ili dankojn, kaj al ili elpremigis sian sanecon.

Sed, ĉu ĉiumonate la sumo plimultiĝis en sia libreto de poŝtoficeja ŝparkaso? Se tiel pasus dek jaroj . . . . unu tagon ŝi tiel antaŭkalkulinte ektremis pro timo de estonteco. Dum la tuta tago ŝi daŭre tusis kun neesprimebla malespero.

Post ĉio ŝi revenis en la kamparon.

La filo de la vendejo de skribilaro ankoraŭ havis okupon en la vilaĝoficejo. Lia patrino sidadis meze de skribilaro en la butiko. De tiam pasis duonjaro.

V

"Mi malprofitis edziĝinte kun vi."

Sanroku kaj Mijoko jam havis tiam interrilaton inter si, ke li konversaciis tiujn vortojn kun ŝi.

"Mi nur povis havigi al mi vian rekrementon. Mi havis tian malprofiton, kiun mi neniam povos regajni."

"Kial en la komenco vi ne evitis edziĝon kun mi, se tiel malfrue bedaŭras?"

"Jes, prave! Sed ĝi montras, ke mi estis stultulo.

Mi estis ridinde sinoferema. Mi kredis vian tiaman humoron tiel, ke la animo revenis al sia propra naskiĝloko .... fi! naŭziga afero! Mi tiel kompatis vin kun falantaj larmoj, ke mi pace amis vin, kiu laciĝis pro longa vagado, kaj mi eĉ kredis, ke via vundita, velkinta animo saviĝos per mia paca amo. Mi serioze pensis tian stultaĵon. Ho ve, mi malprofitis, mi havis malprofiton."

"Kial vi bezonas bedaŭri, ke vi estis poeto?" Ŝi aperigis mokrideton en s'a malbonkolora vizaĝo, kaj diris:

"Neniu diras, ke mi estis ne savita, ĉu ne?"

"Tial mi ne diras, ke vi malprofitis, sed, ke mi mem malprofitis. Se mi volis .... ĉar siatempe ekzistis eĉ 'a edziniĝa propono de filino en la urbo, kiu jam finis la plenan kurson de knabina liceo Kia kaprico! .... kiel vin, kies karno fariĝis senenergia kaj kies animo estas degenerinta ...."

Subite ŝi ektusadis forte kaj daŭre. Kiam ŝi apenaŭ finis tusadon, mirige altiris atenton de Sanroku, ke ŝiaj kaviĝintaj okuloj estis arde brilantaj.

"Diru, bis! M'a animo estas degenerinta? Kia degeneriĝo? Mi nur pene baraktetis por suprenigi mian vivtenadon. Kial tio estas degeneriĝo? Vi pripensu pri vi mem Se vi ankoraŭ ne komprenus post pri-

pensado, mi dissciigos, ke vi faris malpravan kopion de familia etato por delogi min. Kiel oni diros tiam? Ĉu oni ne diros, ke vi estas la viro, kiu havas degenerintan animon?"

Sanroku paliĝis, trovinte neniajn vortojn por rebati ŝin, li donis akran rigardon sur la kunulinon per la vizaĝo, kiun li kontraŭvole mokridetigis. Kiel la serpento, kiu apenaŭ trovis vojon por forkuri, reakirinte malgajan memfidon li diris:

"He, kion oni diras pri la afero, kiun mi agaĉis? La publikan atenton neniel altiras ĉio, kion ajn agus mi, kiu apartenas kelkcentoble pli malaltan klason de la socio ol la estro de nacia oficejo de ordenoj kaj rangoj."

Hu, hu, h ... li mallaŭte ridis kvazaŭ dispremi ion, poste kvazaŭ pene forpeli teruran penson el sia kapo li diris:

"Dio, mia! mi deziris, ke mi estus edziĝinta kun helimpresiga, modernema kaj brilŝajna belulino. Se ne, mi ne povis ami ŝin. Kial mi edziĝis kun la virinaĉo kiel vi?"

"Ĉiuj edzoj diras same. Helimpresiga, modernema kaj brilŝajna belulino! Tamen, he! nenie ekzistas tiaj."

Sed, ŝi konjektis, ke eĉ en la mondo nemulte ekzistas tiel malfeliĉaj virinoj kiel ŝi, post la ekpenso, ke ŝi ne povos esti tiom libera, se ŝi fariĝus vidvino de ĉi tia viraĉo.

Tiam ŝia incitiĝo subite altiĝis k j ŝi sentis la larmojn, kiuj kun bruo sinpuŝas al la okuloj de la tempio.

Sanroku iam skribis jene en sia taglibro:

"La mortinta edzino est's malfeliĉa. Ŝi estis tia virino, kiu skuate en ondoj en la mondo baraktis, suferis, malfacile spiris por levi sin kaj fine venis al mia kuirejo serĉante sian lastan ripozejon. Malfeliĉa edzino!

"Mi ne povis doni al la virino multon da feliĉo. Tion ne mi bedaŭras Malgraŭ, ke siatempe mi povis ami ŝin pli multe .... !

"Mi volas, ke mi estu tiam skribinta kiel epigrafon sur ŝia ĉerko: "Virina animo, kiu vane s rĉis liberon, sed malpravan."

"La libero, kiun ŝi serĉis, estis malprava. Ŝi komprenis liberon en tio, ĝui libertempon havante sufiĉan monon."

Pripensante tion Sanroku mirinde perdis sian memfidon.

Kio estas do prava libero, se la libero, kiun ŝi serĉis, estis malprava?

Kvankam ĉiuj amas liberon, kiel malfacila estas la difino de LIBERO!

(FINO)

POPULARA SCIENCO

ARĤEOLOGIO PER AERVETURILO

K. Cujuki.

„Arĥeologio ĉe la aero" sin komparas je „arĥeologio ĉe la tero." Kaj ĝi ekzistas kune kun aviad-fotografoĵo. La aviad-foto estas farata pere de aerveturilo, kaj ĝi disvolviĝis kune kun la progreso de aerveturilo precipe aeroplano.

× × ×

Kiam ni rememoras la historion de „la arĥeologio ĉe la aero," nia penso venas al S-ro Majoro Elsdale, kiu provis ĝin en la daŭro de la jaro 1880–1887, en Anglujo. Post multaj spertoj per balonoj li inventis la balonon, en kiu sintrovas kamero aŭtomate fotografanta super la loko, kaj post fotografado nature ĝi falas teren perdante gason. Ĉar ĝi estis tre bone elpensita en tiu tempo, laŭ la propono de S-ro Charles Close, en la jaro 1891, la Hinda registaro venigis la ilon, por fari la landkarton per aerfoto, kaj por fotografi la antikvan urbon proksime de „Agrah." Baldaŭ venis la ilo al Hindujo, sed la malfacileco de obstina burokrateco malhelpis al la projekto fotografi en „Agrah," kie estas antikva urbo. Tiel ŝancon oni perdis por fotografi ĉe la aero la antikvan urbon.

S-ro P. H. Shape en la jaro 1906, per armea balono prenis vertikalan kaj oblikvan fotojn de „Stonehenge," kiu estas fama en angla arĥeologia sfero. Sed depost la jaro 1914 la monda milito instigis la progreson de aerfoto kaj aerveturilo, kiu estas bezona ilo por observi la staton de malamiko, kaj ĉi tie ni vidas ĝian propagandiĝon unuafoje. Kiam la monda milito logis al ĝia interesa studo la germanan armeon ĉe *Sinai*, preskaŭ samtempe S-ro Beazeley trovis antikvan lokon per aerveturilo en Mesopotamio. Kaj en Novembro de la jaro 1922, laŭ la propono de Prof. J. N. Breasted, ĉe la distanco de 250 mejloj de Bagdadt, kelkaj malnovaj lokoj apud Eŭfrato estas fotografitaj de Franca Aviadistaro.

通俗科學欄

航空器による考古學

露木清彦

arĥ. ĉe la aero 空からの考古學。
aviad-foto 航空寫眞。
disvolviĝi 發達する。
progreso 步進。
sperto 經驗。
balono 氣球。
inventi 發明する。
kamero 暗箱、寫眞機。
aŭtomate 自働的に。
gaso ガス。
elpensi 發明す。
propono 提言。
registaro 政府。
venigi 取寄せる。
aer-foto 空中寫眞。
malfacileco 困難。
burokrateco 官僚主義。
projekto 計畫。
vertikala 垂直の。
oblikva 斜の。
Stonehenge ストーンヘンジ。
instigi 刺戟す。
observi 觀察する。
propagandiĝo 普及化。
logi 誘ふ。
armeo 軍隊。
ĉe la distanço de ……の距離に於て。
aviadistaro 航空隊。

termezurad 測地。
aer-laboro 空中作業。
aer-transportado 空輸。
socia servo 社會奉仕。
agado efektivigita 實際化された行動。
aviad-foto-tekniko 航空寫眞術。
rekognosko 偵察。
anstataŭigi 置き代へる。
restaĵ-loko 遺跡。
arĥeologo 考古學者。
vuali ヴエールをかける（ぼんやりさせる）。
Kamuflado カモフラージ。
konfuzi 困らす
militisto 軍人。
„por humaneco" 人道の爲。
intima rilato 密接な關係。
restaj-lok-arĥeologo 遺跡考古學者。
Depart. de Aviado 航空省。
milita afero 軍事。
enviinde うらやましい程。
tumuluso 石室古墳。
Rakuro 樂浪。
ŝel-amaso 貝塚。
Ubajama 姥山。
Ĉiba G. 千葉縣。
provaĵo 試作品。
neesplorita loko 處女地。
etudo 習作。
procedo 處理。
disciplino 訓練。
atendinda 期待すべき。
pripensi 思考す。
funkcio 機能。
efiko 効用。
limo 限界。
eco k. ĉirkaŭo 特質と周圍。
evidentigi 明かにする。
esploro 調査。
elfosigo 發掘。
kompletigi 補ふ。

Nuntempe, termezurado kaj aliaj aerlaboroj, kune kun aer-transportado montras tre bonegan funkcion, kiel la socia servo de aerveturilo en paca tempo. Ankaŭ aerfoto por arĥeologio estas unu el ili, supre menciitaj aferoj estas agado efektivigita por scienco de aviad-foto-tekniko, kiu progresis depost la granda milito. Ĉe tiu okazo „rekognosko" al „malamiko" estas simple anstataŭigita per „observado" por „restaj-loko." Precipe la laboro de arĥeologoj estas pli facila ol tiu de armeo. Ĉe milito, malamiko ofte vualas sin per „kamuflado," kontraŭe, kun arĥeologoj la loko estas tute netrompanta kaj neniam konfuzanta per „kamuflado" kaj ni, arĥeologoj estas feliĉaj pli ol militistoj, ĉar nia afero estas „por humaneco" kaj ne „por batalo".

Ĉe la nacioj, kie oni havas intiman rilaton inter arĥeologoj pri restaĵ-lokoj kaj aviadistaro aŭ aviadistoj, „la arĥeologio ĉe la aero" per aer-foto tre disvolviĝas kaj tre riĉigas la studmanieron de arĥeolgio. Precipe en Anglujo, kies Departemento de Aviado prezentas al ĉiuj sciencistoj la aviad-fotojn krom la fotoj por militaj aferoj, la aer-arĥeologio enviinde disvolviĝas, kvankam ĝi havas mallongan historion depost la jaro 1922.

En nia lando, tamen, ni nur havas mizeran historion. Nome, la aer-fotoj de tumuluso de „Rakuro" en Koreujo kaj tiuj de ŝel-amaso ĉe *Ubajama*, en Ĉiba Gub., kiel provaĵoj, estas prezentitaj por ni. Certe, nia lando estas tute neesplorita loko por „la arĥeologio ĉe la aero." Se ni, kiuj spertis du etudojn, denove ripetus multajn spertojn pere de aviadistaro kiu fotografas kun bonaj procedo kaj disciplino, la sperto montros al ni la plej grandan indon de arĥeologiaj aerfotoj. La atendindaj multaj rezultoj en nia lando, ankoraŭ tute apartenas al „morgaŭa tago", sed sufiĉe promesita la „morgaŭa tago".

× × ×

Ni pripensu la funkcion de arĥeologia aer-foto, kian rolon ĝi nun havas. Tio bone klarigos al vi la efikon kaj limon de „la arĥelogio ĉe la aero."

Ĉe la unua grado de arĥeologia aer-foto, oni prenis ĉe la aero la foton de la loko, Kies econ kaj ĉirkaŭon oni okule evidentigis per esploro aŭ elfosigo sur la tero. Tio sekvis al esploro aŭ elfosigo kaj kompletigis la arĥeologion ĉe la tero. Sed baldaŭ aperigis la duan gradon la disvolviĝo de aer-foto. La restaĵo reaperas per aer-foto, kvankam ĝi estas ne-videbla (aŭ malfacile videbla) per

observado sur la terô.

Ĉe tiu okazo, la restaĵo kuŝas sub la grundo, kaj plantoj sur la tero kaj radioj de la suno fariĝas grava faktoro. Nome, kreskaĵoj mem plantitaj sur la restaĵ-loko aperigas „kreskaĵ-signon" montrante specialecon de kreskada diferenco kaj tono, kune kun kreskaĵoj sur la grundo, sub kiu ne sin trovas restaĵo, pro tio restaĵ-loko sub la grundo aperas sur fotografaĵo. Ĉiuj laboroj sur la tero—elfosigo aŭ esploro—sekvas tion.

Tiele la mirinda eltrovo de *Wordhenge* ĉe Wilt aŭ aliloke en Anglujo estas farita, kaj ĉe Nonvitch en sama lando ankaŭ trovita la antikva urbo, en kiu estas katedralo, banejo aŭ avenuoj de Roma epoko. Antaŭe neniam oni pensis, ke antikvaj urboj kaŝitaj sub la grundo malkovriĝas sen elfosigo. Sed nun, la afero sendube fariĝis reala, kaj preciza aer-foto de restaĵ-loko estas prezentita antaŭ ni. Nur aviad-foto plenumis tion. Pro tio, tiaj aviad-fotoj de arĥeologio antaŭas al laboro sur la tero, kaj kondukas la elfosigon kaj esploron ĉe la tero.

La aerveturilo por la fotografado egalas al la teleskopo ĉe astronomio, kaj fotografita aviad-foto komparas astronomian foton, kiu okaze montras novan stelon. Do, tio plene gajnis tute novan kampon, kiun ni, restaĵ-lok-arĥeologoj, ne povis plenumi per ĉiuj laboroj sur la tero en pasinteco. Jen, la afero montras al ni la turniĝon de studmaniero arĥeologia. Ĉe tiu vidpunkto ĝi nun okupas gravan rolon kaj ĝin plenumas.

Kompreneble, por fotografado ĉe la aero oni bezonas certan grandecon de fotografendaĵo. Restaĵo mem ne taŭgas por aer-foto ĉe individua stato. Aer-foto de argila vazo aŭ tiu de unu bronza ilo ktp. estas tute sensencaĵoj. Sed kiam „*Haniŭa*" (argil-figuro) estas metita ĉirkaŭ tumuluso kaj lokitaj la staraĵoj, kaj kiam formas la restaĵlokon la kontrasto de restaĵoj (okulvida), kaj en la okazo de ordinara restaĵ-loko nemovebla, la aer-foto indas esti fotografata. Sekve, la arĥeologio ĉe la tero en si mem havas distinktan limon. Nome, nenian rolon aer-foto prezentas ĉe „restaĵ-arĥeologio" sed ĝi plenumas brilan servon nur ĉe „restaĵ-lok-arĥeologio". Kaj por sufiĉe plenumi ĝian funkcion, la grundo kiu enhavas la restaĵlokon, devas klare prezenti „ton-kontraston" kun tiea ĉirkaŭaĵo. Kaj kiam la loko montras saman tonon kun la ĉirkaŭaĵo, eĉ en la okazo de bona restoj-loko estas malhelpata la observado ĉe la aero.

grundo 土壤。
faktoro 因子。
planto 植物。
planti 植える。
kreskaĵo 植物。
kreskaĵ-signo 作物特質。
kreskada diferenco 生長差異。
tono 色調。
eltrovo 發見。
katedralo 寺院。
banejo 浴場。
avenuo 街路。
fariĝis reala 現實性を帶びて來た。
aer-foto (高所より撮せし寫眞の意)。
antaŭi 先行す。
konduki 導く。
egali 等し。
teleskopo 望遠鏡。
astronomio 天文學。
kompari 比較す。
turniĝo 轉向。
studmaniero 研究方法。
vidpunkto 見地。
foto-endaĵo 寫さるべきもの。
individua stato 個々の狀態。
argila vazo 土器。
bronza ilo 銅器。
sensencaĵo ナンセンス。
Haniŭa 埴輪。
staraĵo 樹物(タテモノ)。
kontrasto de… (視覺的) 遺物の配合。
nemovebla 不可動的な。
distinkta 判然なる。
restaĵ- 遺物考古學。
restaĵ-lok- 遺跡考古學。
ton-kontrasto 色調配合。

海外報道

小此木貞次郎

其の後の Scherer 氏

日本から上海へ渡つて支那で大いに宣傳に努め、シャム、印度、エヂプトを經て歐洲に入つた。此の5月の上旬は ICK で定められた日定表によれば Palermo-Messina あたりに滯在の筈である。そして8月1日—8日の Krakovo の萬國大會に參加する前は、Napoli, Roma, Venecia, スイスを通過してゆくことになつておる。

Scherer 氏の此迄の旅行の效果が頗る輝かしく、殊に日本の各地に於て齎された成功が一々詳細に Heroldo 紙によつて全世界のエスペランチスト間に報導されて到るところで讀者の興味をそゝつてゐる譯である。その影響として昨年六月發表された ICK で決定した日程以外の國へ Scherer 氏を招待せんとする申込が續々 ICK へ舞込んでくるといふ活況。そこで ICK は同氏の宣傳旅行を更にのばして、Krakovo の大會後歐洲の各地を隅々まで廻ることに日順を變更した。丁度大會後の季節は最も此の種の催しに適しておるもので、grupo, klubo, societo 等その準備を心掛けてゐる。

歐洲の日程表

國別	滯在(日)	日附
1. Polujo	6	15—21 (8月)
2. Litovio	12	22—2 (9月)
3. Latovio	12	22—2 〃
4. Estonio	12	22—2 〃
5. Finlando	5	3—8 〃
6. Svedujo	18	9—25 〃
7. Norvegujo	18	9—25 〃
8. Danlando	5	26—30 〃
9. Germanujo	18	1—18 (10月)
10. Ĉeĥoslovakio	12	19—31 〃
11. Aŭstrio	12	1—12 (11月)
12. Hungarujo	5	1—12 〃
13. Rumanujo	5	13—18 〃
14. Bulgarujo	12	19—1 (12月)
15. Jugoslavio	5	2—7 〃
16. Itajujo (Norda)	5	2—7 〃
17. Hispanujo	10	8—18 〃

朝から晩までエス語で

萬國大會、其他の國際大會では最早完全に Esperantujo を現出することが出來るであらう。正に朝から晩まで耳にする言葉はエスペラントの bonsono である。之もその例の一つ。10-a Internacia Tendaro de la Skolta Esp-ista Ligo. 主催者側は Budapest の Skolta Rondo Esp-ista である。期間 14-20, 7月。費用は3食で一日1圓餘。場所は Skolta Parko といふのがあり山と山との間に横つており、町端になつておる。參加者は各國のボーイスカウト團員であればよいので、參加するためには汽車賃の割引をもうけ得る。勿論云ふまでもないが公用語は唯一つ Esp. のみで、エス語で各種の laboro, konkurso をやらうといふのである。餘興は朗讀、團歌、ボーイスカウト冒險物語、手品、Skolto の技術をエス語指令による練習等々。かくして國際的な集りが、internacia lingvo によつて更に特殊の atmosfero を生み出し、一方エス語の練習及び實用化に最もよい機會と云ふべきである。之は云はゞ學生等がある一つの目的遂行の爲めに行ふ合宿の一種類とも考へられるのであつて、Esp. で朝から晩まで實際日常生活の用をたしてゆくといふ點から、Esp. の實力を短期に増進せしめるに最もよい方法の一つである。我が國でも既に之を實行して、その效果を擧げておる grupo が數箇あるが、比較的時間の餘裕をもつ學生 Esp-isto-grupo (やがては地方 grupo) 等にては今後計畫の一つとして考慮さるべきものではなからうか。

其後のルート女史

去年12月日本を訪れたルート女史は其後米國へ歸國の途中ホノルルの學校、倶樂部其他に於てエスペラントに就いて盛んに講演をして歩いたが、最近の通知に依ればサンフランシスコ及びポートランドに於てはラヂオを通して宣傳をしたとの事、同女史は十年前より世界各地を宣傳旅行して廻つており其 energieco に對して吾人は深甚の敬意を表す次第である。

イタリーの Gvidlibro

イタリーで40萬の會員を有する "Touring Club Italiano" では此程 Esp. で "Milano kaj Lagoj de Lombardio" と題し gvidlibro を發行することになつた。此の書は "Guides Bleus" や Baedecker" 等の nacilingvo で書かれたものと肩をならべ得る程内容、體裁共に立派なものである。120頁。9枚の地圖と6枚の平面圖とを含み、國內旅行に於て度々相遇するイタリー語の說明や專門用語殊に建築に關する術語等に註釋をエス語で與へておる、他イタリー旅行上の種々の注意が書かれてある。Esp. の文献を豐富に作り持つことは運動上エス語の實用性を以て他の人々を納得せしめるために必要なことは云ふまでもない。此の點 turismo といふ實際的な原野に於て、各地、各國紹介の folioj 又は我が鐵道省發行の "Japanlando" 其の他 "Aŭstralio" 等の gvidlibro に加へて此の實用價値に豐める書を吾々の Biblioteko に新しく持ち得ることは力ある前進と喜ばねばならぬであらう。

印度エス運動

インド Esp-isto 間の機關紙は Hinda Esperantisto といふのがある。生れて3年目。隔月發行。表紙を加へて8頁。記事は英語と和蘭語とエス語とで記されておる。事務所は: Liem Tjong Hie, Karangtoeri 66, Semarang-Java.

濠洲エス運動

地球の南半球に位置するオーストラリアの Oficiala organo は南半球の晴空に輝く星に因んで "La Suda Kruco". 毎月8頁月刊。創設が1930年、31年の三月號が129號となつてゐる。報導欄に New Zealand Esp. Assoc. の活躍を報じておる。Auckland で今年度の大會が開催される筈。內地の運動の報告は地方別で7つ程記載されてゐる。Redakcio-Administracio: Box 731 F. Elizabeth-str. P. O., Melbourne, Aŭstralio.

Esp. 活動寫眞

我が鐵道省の「四季の日本」がエス語のみの說明入で昨年東京の同志の前で映寫して大拍手喝采を受けたが、今度和蘭紹介の filmo が和蘭政府の命令により製作されて、說明は全部 Esp. で寫された。2月5日 Praha の活動館で第一回の上映、同志及び一般觀衆700名程。映畫は頗る美しく同志は勿論政府委員も大いに喜んだ。翌日 Smichov といふ所の女學生400名のために上映され大いに宣傳の實をあげ、更に Bakov, 及び Praha の學校の生徒の爲めに行はれた。勿論今後要求に應じて Praha 其他の町々で上映される筈である。

さて此の和蘭の成功はチエッコ當局の人々をして、眞面目に同國紹介の filmo を Esp. 語說明によつて作製しようといふ意見を懷かしめるに至つた。かくして國際性をもつ活動寫眞等の說明には當然 Esp. が益々進出すべきもので、Radio の原野に於ける發展に比し、映畫界に於けるそれが不振とさへ思はれる位である。之は今後各國同志の活躍を此の方面に期待し得ることを示すものである。

各 國 情 報

佛國商業會議所 最近の理事會議にてパリー商業會議所長 A. Baudet 氏の提案により Esp. を商業語としての實用性を認める事が決議された。

Laborkunsidoj (23回大會) Krakovo の大會の laborkunsido に於て各方面の問題の重大なる提案をされんことを ICK で期待しておる。既に gazetaro, radio 等についての提案がある。又出席する同志の中で宣傳及び實際的仕事に關した問題で提案演說 (15分間) をされることを希望すると。

北方でも Ĉe-metodo 北緯68°251といふ隨分北に位するノールウエーの Narvik で Ĉe-metodo で講習が行はれた。出席者58名。大部分は勞働者であつた。講師としては諾威 Esp-ista 聯盟と Inter. Ĉe-Instituto de Esp. との協定により Karavanestro の Jens Schjerve 氏が派遣された。講習所の場所が狹いため多數參加を斷はらればならなかつた程であつた。

"Soveta Pedagogio" Sovetujo で新らしい文化的施設をなし鋭意社會教育をなしてゐる。Soveto に於ける文化運動及びその目的に就いて價値ある文献を集めて今度 SAT で "Soveta Pedagogio" なる broŝuro を發行した。40 pg. 10×25 cm. 0.50 mk. g.

★……LA…REVUO…ORIENTA…★…ENLANDA…KRONIKO……★

内 地 報 道

★…締切…毎月十五日……編者…露 木 清 彦…★

各 地 報 道

Tokio 定期會合所四つ

★第一土曜 19 時 Mita Vespero〔三田明治製菓地階にて〕
★第二土曜 19 時 Arĝenta Kunveno〔銀座明治製菓階上、但し他の土曜日わ 14 時より〕
★第三土曜 19 時 Sodaj Amikoj〔省線高田馬場より早大え約二丁左側藥局の横を入り二軒目喫茶店小蝶〕
★第四土曜 19 時 Venuso〔新宿明治製菓階上（何れも amikiĝa kunveno です、最近どの會も活氣漲り aĉulo ぶりを發輝してゐます。生きた言語に接して一週間分の freŝa energio を貯えよ。）

◉Serpento 座再起 セルペント會一部の anoj わ四月十日より再び無形劇場 Serpento 座を確立し La Patro Revenas の研究開始（毎週金曜日夜）近日中に第一回朗讀會を催す筈。希望者にわ公開す、豫め下記に申込まれたし池袋 1,681 セルペント會。

★櫻井女塾 過ぐる日 Root 女史が本郷の櫻井女塾にて講演したのが動機となり一月の學期初めから Alexander 女史を講師としてEsp. の講習が始まつた。三十餘名の女生徒わ英語を介して Esp. を學ぶと云う一擧兩得。四月の新學期からわ regula な講義が經續される。

★神田・中華 YMCA 一月より三十名の學生に對し Esp. 講習開始さる Alexander 女史わ會話及發音の講師として奮闘。

★クララ會 4月12日佐々城氏方にて例會開催、出席同志十人、譯讀會話發表すべて共同的になされ質的に充實した會合であつた。

◉Nova Kunsido 今度本郷を中心として會話練習會を開くことになつた。第一回を5月8日(金)19時より本郷三丁目明治製菓にて。尙其後の方針（日・時・場所）を定めたい。多數出席を希望す。

Jokohama

★Ĉina Esp-isto 來訪 3月14日中華民國青年 陳國東君が關東から來る。福喜多、飯田兩氏市中を案内。少したよりないが esp-isto わ esp-isto である。如風來、如風去。

★Germana Esp-isto 來濱 3月20日、三月號既報の（東京の部參照）R. Pfütze 氏來濱。時間不足のために歡迎會もひらけず、僅に二三の同志が會つただけで、殘念であつた。

★Franca Esp-isto 再來 3月27日、佛國汽船 Angers 入港。Sacha-Amouroux 君がやつて來た。荒川、鈴木、飯田三氏早速船に飛び込む。小さい身體に一ぱいの愛嬌を湛えてアモ君がとび出して來る。かたい握手。その日から同君は荒川、鈴木、高村、福喜多氏の宅を順次に泊りあるいて、夜も晝も在濱同志がつききり。4月2日有隣堂で V. J の歡迎會。參會者約 30名。東京から平澤氏參會。4月5日未明好印象を殘して故國え。

Niigata

自動車雜誌「オート」の功獻 二月號より同誌わ其の四頁をさいて Esp. の爲に提供し「綠星」と云ふ誌名で別冊附錄として配布される。Esp-isto の樂書帳と云つた感じの而も freŝa なもの。〔北越エス會の方々の活躍が之によつてうかゞわれる。〕

★二月開催の初等講習わ終了後直ちに中等科として繼續し更に社會青年主催の初講にて七名の同志を得た。勞働者が大部分で英語を解しない者が一ケ月有餘で Esp. を良く讀めるやうになるのわうれしい。（久保）



La memoro por S-ro S. Amouroux, franca s-ano.
前列右より三人目 Amo 氏次わ清水氏外横濱エス協會、横商エス會の諸君

エス語にて告別式

【Sendai】 永眠される其の最後まで、たゞ esperanto のみを思いつゞけて逝去された仙臺に於けるエス運動に忘れることの出來ぬ萱場眞氏の告別式が3月9日、日本メソヂスト教會に於て行われた。特筆すべきわ其の大部分が esperanto で行われたことである。酒井瞭吉氏の聖書朗讀、松本浩太郎氏の祈禱、Esperoの合唱、菊澤季生氏の Majstro Zamenhof の祈禱、及び各エス會代表の弔辭等であつた。萱場氏もさぞほゝえまれて安らかに眠られたことであらう。

仙臺エス界近況

最近講習會に輪讀會に又 esp-isto 間の親睦に堅實な歩みを續けている。仙臺に於ける中心機關である仙臺エス會（S. E. S.）わ1月3日の Sabata Kunsido を以て今年の皮切りとし初等、中等の講習會を矢つぎ早やに開催し、又機關誌 Nia Voĉo の發刊等もあり、すばらしい活躍ぶりを見せている。S. E. S. の月例會わ1月24日（30名）、2月21日（40名）に、明治製菓中央クラブにて開かれ、parolado に kanto に意氣あふるるばかりであつた。現在會員數わ昨年11月創立當初の25名の2倍を突破して59名（婦人25名）を數えるに至つた。尙前期初等講習に引きつづき二ケ所にて中等講習を開いてゐる。又3月末一週間短期初等講習を開き成功を收めた。

★S. E. S. の遠足會 4月3日の良き日和を利用して八木山へ ekskurso を行つた。恰度歸鄕されている方々が多く、集まつたのわ7人（f-ino 5人）であつたが愉快な一日を過した。

★東北帝大醫學部エス會生る 小兒科の吉田氏の klopodo に依つて、新らしく醫學部エス會が生れた。會員15名を有する同會の活躍が期待される。帝大、二高、東北學院、今度生れた此の醫學部エス會等、S. E. S.（仙臺エス會）をとりまいている之等エス會は、新學期を迎えて再び積極的運動に入うとしてゐる。

校友會にエス會編入さる

【Uraŭa】 浦高エス會わ今度學友會の中に編入され文化部の一部として經濟的補助をうけることゝなつた。之わ高校中で二番目であらう（三高についで）。尙會話會を守隨、野上兩氏を指導者として、初講を守中、矢島、小林の三君で近々開催の筈。

Sapporo 2月22日今井記念館にて「エス語で歐洲行脚」の題下で滋賀縣の山本佐三氏の講演があつた。（寫眞わその歡迎會の折。前列中央同氏）

★3月1日より毎週火曜日白樺喫茶店で初等講習を開催。講師わ札幌エス會々員が交互に勤めてゐる。



聽衆一千人の大講演會

【Seŭlo】 2月25日19時より京城鍾路朝鮮中央基督敎青年會館大講堂にて、京城エス倶樂部主催、京城東亞日報社後援の大講演會わ聽衆遂に一千人を算し、入場し得ざるもの數多あり、未曾有の大盛況であつた。

1. 開會の辭（洪東璇） 2. Espero 合唱（部員） 3. 趣旨説明（倶樂部長白南奎） 4. 國際語と人類愛（東修一通譯、辛鳳祚） 5. エスペラントと文學（金億） 6. エスペラントの輪廓（白南奎） 7. Tagiĝo 合唱（部員）閉會。（寫眞わ白南奎氏の講演ぶり）



Ĉoĉun 2月16日より一週間醫科大學豫科にて初等講習開始、受講者12名。尙冬期の講習會わ春秋の講習會が市民一般に對して行われたに反して醫大の學生生徒を中心として行われたもので修了後毎週水曜日16時より17時まで醫大豫科にて kunveno を開いてゐる。（奉天エス會）



[OOSAKA] La 5an, Apr., Bonven-Kunsido por S-ro Prof. R. Pfütze Germana S-ano ĉe Nova Stelo. De maldekstre, S-roj R. Cuĵi, R. Pfütze, S. Koĵima, J. Kanemure kaj aliaj.

大阪に於ける S-ro R. Pfütze

【Oosaka】 四月五日 17.30 時の列車で東京の同志に送られて來阪、N.S. 及 O.E.S. 會員に歡迎され驛前の喫茶店にて一同氏を中心に食事を取り19時より Nova Stelo にて多數の同志を招待して茶話會を開催。旅の疲れ、風邪に少し侵されてゐるにもかゝわらず旅行談、各地の Esp. 運動状況に一同耳を傾けた。翌日わ市內各所の舊跡名所を見物し、夜わ夜櫻、道頓堀、心齋橋その他を見物した。七日夜 O. E. S. の例會に出席し興味ある旅行談をした。大阪滯在三日間わ兒島氏宅に投宿し八日わ神戸え。

★新星會第一回 Esp. tago. 3月15日14時から第一回 esp-tago を開催し10名出席、賀根村氏指揮の下に Kanto de Studento を合唱、黑崎氏の手により記念撮影の後茶話會にうつる。黑崎、兒島、辻三氏の parolado あり。bonhumora の中に babilado en Esp. に花が咲き時のうつるのをわすれる。

Oocu

大津エス聯盟第二回例會 四月一日 19 時より魚善食堂階上にて會合、出席者各會より23名、各會の近況報告、大津エス會の振興策として機關紙刊行の具體案協議 その他 來賓の挨拶及 paroladoj の後 liberaj horoj の間 kanto, interbabilado 等あり、22時閉會、今回わ京都より宍戸圭一川村清次郎氏の出席せられたことわ感謝に値す。尙今回の當番わ大津に於て誇るべき vi-rina rondeto が一寸のすきもなくよく arangi し、會の進行を計られた事わ大剌戟であつた。

★希望社大津エス會發會式 長期初等講習が3月29日に終了したので、同日記念茶話會を濟生看護婦學校內で開催し、今後わ毎週土曜日に集會し Karlo を研究することに決した。受講者18名の內8名わ婦人で、產婆看護婦もまじつてゐたことわ注目に値する。

Koobe

4月12日神戸エス協會の第一回の pikniko, 甲陽公園にて Tea-tro Pioniro の有志諸孃諸氏の野外劇、餘興津々。

Ŝimonoseki

3月22日13時より北九州 esp-aro の例會を中山氏宅に開く。出席者11名、先づ K.E.L. の態度について松葉中西兩氏間に diskutado あり、白石氏の rekta metodo に關する說明あり、松葉氏 novial を以つて rekta metodo の實演をされその効果の大なるにおどろく、次回は戸畑に。

Nagasaki

古川貞子孃送別會 長崎エス界の名花古川貞子孃にわ濟南領事館橋爪氏と御婚儀とゝのい長崎を去らるゝことゝなりし爲14日同孃の送別會と月例會を併せ開催す、田崎氏司會の下にクラブ代表高原氏送別の辭を述べ、古川孃之に答う、外數氏感想を語り同孃わ最後の subsk-ribo を殘して講堂破れんばかりの拍手の中に退場。

☆相繼いで同志來る 新潟醫大生理學教授橫田氏わ長崎醫大に於ける生理學會に御出席の爲3月31日朝來崎、東大解剖學教授西成甫、慶大教授望月兩博士わ同じく解剖學會列席の爲4月2日來崎、同夜同志相集まりジヤパンホテルに於て晚餐を共にした。

★ 4月10日夜初等講習修了式を開催、クラブ側より富松幹事、講師として田崎氏の挨拶あり、植田教授のエス語の効能につき雄辯一席記念撮影の後茶話會を開く、尙修了者にわ向後毎週火金二回中等講習繼續の豫定。

全國講習會便覽 [出來るだけ各欄詳細に御報告下さい]

開催エス會	種類	期日	時間	用書	受講者	講師
大牟田エス會	初	3.15→	水 2	希讀	7	新村喬樹
同（三交俱樂部）	同	4.1→	火 2	初讀	10	久保平季
同（醫師會館	同	1.15→	水 2	初讀	10	岡田啓基
同（三交俱樂部	中	4.1→	火 2	倫敦塔	5	同
新潟社會青年	初	3.20→	金日 2	プロ・エス	7	樋口
同	中	3.20→	金日 2	—	8	佐藤、久保
奉天、醫大エス會	初	2.16—22	毎日 2	短講	12	伊藤
長崎エス、クラブ	同	2.23—4.6	月金 2	同	15	田崎隆一
仙臺エス會	中	2.26→	木 2	パロラードイ	12	菅原慶一
同（婦人部）	同	2.27→	金 2	Karlo	10	堀田幹雄
K. 大津エス會	初	2.25–3.29	火土 2	講書	18	中村卯三
札幌エス會	同	3.1→	火 2	同	10	會員

地方會機關紙

★Sabato（3の8） 橫濱、橫商エス會（エス文の讀物が豐富だ。非賣品）

★Nia Voĉo（4） 仙臺、萱場氏追悼號。

★El Nara（3） 奈良エス會發行（不定期、13×19 cm. 16 p. 宮武正道氏編輯の美麗な謄寫刷。エス文のないのが淋しい。「エス語の浮游性」同感。）

★La Bulteno（2の3） ★Nova Stelo（13）

★Stelaro（1の2） 長崎縣諫早綠之友會（謄寫刷 16.5×24.3 cm. 20 p. エス文に研究欄に相當の豐富を示してゐるが少數の會員間で機關紙を發行するわ困難であらうから自重せられたい。

★Ŝinko（第二號） 新興エス會（京城永樂町2の84）

創立の地方會

★東北帝人醫學部エス會 （15）
仙臺市北山町13 吉田松一

【移動】 高岡エス會——高岡市茅野町73奈良榮二氏方え。

新聞雜誌とエス語

★長崎の青年——月刊四六倍大12頁、毎月四頁乃至六頁 Esp. 文に又わ Esp. に關する名士の言を掲載してゐる。

★白生地月報（3月號）——京都生絲商吉川商店の月報で處々に Esp. が見られる。

★The Rotarian-European Number Feb. (1931) ロータリークラブ內に於けるエスペラント講習の記事。

★橫濱青年2月號——橫濱基督教青年會內に於けるエスペラント講習。

★東京青年2月號及3月號——東京基督教青年會に於けるエスペラント講習の記事。

★學士會月報第五一六號——五十音區改訂私案（sh の代りに ŝ, ch の代りに ĉ, ts の代りに c の如きエスペラント式の文字を用いた方が簡單で便利であるかも知れない云々。）

★優生學（四月號）——Pri Sekshormono……D-ro. T. Jasuda（完結）大本とエスペラント……伊藤榮藏

★河北新報 5, 11, 25, 26, 27.——北日本の同志と私（仙臺と盛岡）……J. R. Scherer.

第九回東京學生 エスペランチスト聯盟例會

第九回聯盟例會を早大エス會主催の下に五月十六日（土）午後2時より早稻田大隈會館內學生ホールに開催の豫定。聯盟の名簿により加盟者各位に招待狀を差上る豫定なるも、名簿に記名洩れの各位にも振つて參加あらんことを主催校として御願ひ致す次第です。

（早大エス會）

松田恒次郎氏の訃

奈良縣の古い同志松田恒次郎氏去る二月十七日逝去。氏は醫師で、磯城郡川東村在住、明治四十年に學習を始められた。其頃奈良女學校で講習をなし長鬚をしごき乍ら一時ばかりで文法全部を講了滿場をあつけにとらしめたと云ふ逸話がある。享年六十三。心より追悼の意を表する。

本學會評議員

田邊治夫君を惜む

タナさんが死んだ、三月十五日田邊治夫君は廿六年の短かい生涯を終つた。其前々日卒



業の最後の試驗を病を押して受けた後教室に訪れて來た時、マサカ之が最後の訣れにならうとは夢にも思はなかつた。僕が君を識つたのは、君が東大醫學部に入學してから間もない事であつた。其以前の事は知らない。其以後四年の間我エスクラピーダ、クルーボにあつて、最後の日まで骨身を惜まず働いて呉れた事は知る人ぞ知る。何の衒ひ氣もなく唯だエスペラントに精進して、君こそ本當のエスペランチストであつたのだ。師弟と云ふよりも、友人と云ふよりも、同志と云ふよりも、親子の樣に、兄弟の樣に親しくしてゐたアノ純眞子供の樣なタナさん。タナさんは死んだ併し君の記憶は君を識る限りの人の心の内に永久に若く清く美しく活きて行くであらう。

西　成甫

萱場眞氏が死んだ

古い同志は思ひ出すことだらう。大正13年第12回日本エスペラント大會が仙臺に開かれた時、大會準備に我を忘れて奔走してゐた熱烈な同志萱場氏の姿を。あの萱場氏がエス語講習指導の最中ふとした風邪がもとで急に3月7日倒れられてしまつた。

氏の生涯は全くエス語の普及宣傳に捧げられてゐた。その氣一本な拘はることのない性格、國際語の普及人類愛への燃ゆる熱情、東北大學の三奇人と稱せられた。

大正12年冬同志を糾合し諸エス會と仙臺エスペラント聯盟を組織し大正13年には大會を前にして仙臺在住の諸民族の融和を目的として人類同胞俱樂部を黑澤良平氏等と共に創立し、又基督敎徒間のエス語普及を目的として大日本基督敎徒エス協會を設立し、又「平和デー」を催し仙臺の女學生200餘名を動員して Esperanto 鉛筆の辻賣りをやらせ大會費用にあてた。氏が世人の無關心な態度に憤慨し長男を "Servanto de Homaro" と命名したこともその固い信念の一端を示してゐる。又第12回大會の際宮城縣當局及仙臺市民有志を動かし、大會、仙臺、松島の1900呎に餘る映畫を作製した。最近は仙臺エス會の宣傳部委員長として色々畫策され、綠星エスペラント日曜學校を主宰して若い generacio にエスペラントを吹き込むことに熱中した。その最中中耳炎を煩ひまもなく譫言にエスペラントをしやべりながら多くの同志に護られて3月7日歸らぬ客となられた。



葬儀は3月9日メソヂスト敎會で行はれたが、SES からは綠星で飾られた花輪が綠星旗に包まれた同志の靈柩に捧げられ、聖書朗讀も祈禱も皆エスペラントでなされ、Zamenhof の祈り "Preĝo sub La Verda Standardo" が唱へられ、"Espero" (Motteau) が響き渡つた。東北大學エス會を代表して井上總長が弔辭を述べられ、UEA の delegito, 東北大學醫學部エス會、二高エス會、SES 婦人部、SES 等の各代表が相續いてエス語或は日本語の弔辭を述べた。式場の入口には "Funebrejo de S-ro M. Kajaba" と大書され、會葬者一同には Espero 樂譜及その譯、エスペラント宣傳ビラ等が配布され、neesperantistoj にも SES の有能な宣傳部委員長の死が强く印象された。

萱場氏は死んだ。しかしその花々しい Esperantisto としての業蹟は永遠に消えない。漸く成功の曙の見えそめた今 SES にとつてかけ換へのない Kajaba 氏を失つた事は大打擊である。しかし我々は力を合せて働かう。

萱場氏よ安らかに眠れ!!

Sendai Esperantista Societo

學會取次洋書目錄

★洋書は如何なる場合でも前金註文でなければお送り致しません★
—— 洋書の値段は毎月變動があります ——

…… 此處に無いのでも在庫してゐる物もありますから
御希望の書物は往復葉書で御照會下さい ……

新着・再着書

(定價頭送料錢)

★Esperanto por Infanoj. 標題の通り小さい子供の爲のエス教科書各頁無數の挿畫入 0.85 (4)

★Ĉe doktoro: 珍らしいヘブライ語よりの飜譯、醫師の處で起る喜劇 ……………0.15 (2)

★Nova Testamento. 多數御希望の方があるので取寄せました …………………… 並 0.30 (2) 特上革裝 3.30 (0.12 書留)

★La Sankta Biblio. 舊譯の部はザメンホフ博士譯 ……………… 並 3.50 (12) 上 4.80 (10) 革裝 7.30 (書留 18) 革特製 11.50 (18)

★Preparantoj de l' milito. 反革命團體産業黨に對するクリレンコ檢事の告訴狀………0.90 (4)

特におすゝめする好讀物

★**Vortoj de Cart.** エスペラント學士院長 Cart の論說全集、我々 Pacaj batalantoj に道をおしへるもの、文體又雄健 肉筆署名付…………………1.60 (6)

★**Vivo de Zamenhof.** 〔愛の人ザメンホフ〕傳、Ed. Privat 博士著、萬人必讀の聖典……………………………1.60 (6)

★**Historio de Esperanto.** Ed. Privat 博士著、流るる如き文體、上卷 1887–1900年、下卷 1901–1927…………………… 上卷 1.30 (4) 下卷 3.10 (6)

★**Verdkata Testamento.** Raymond Schwartz の諧謔詩集 Ĉu erotika? …0.90 (4)

★**Kompleta Gramatiko.** エスペラント界唯一の文法書、各人座右に備ふ可きもの……………………………2.10 (8)

★**Plena Vortaro.** 贅言を要せず…… ……………………………5.00 (18)

★**Belga Antologio.** 第20回萬國大會に際して出版された尨大な本、二部からなりフランス語及フランドラ語で書かれたベルギー文學の粹を蒐めた大鳥瞰圖… ……2.80 (16)

★**Joseph Rhodes** kaj la fruaj tagoj de Esperanto en Anglujo. 英國エスペラント運動の Pioniro J. Rhodes の傳記と初期の運動史………… …… 上 1.85 (6) 並 0.90 (4)

ザメンホフ博士譯著書

★Fundamento de Esperanto…………0.55 (4)

★Fundamenta Krestomatio …………1.30 (8)

★Aldono al la dua libro de lingvo internacia. 世界で最初にエスペラント語で出た本の複製品 ……………………………0.25 (2)

★Rabeno de Baĥaraĥ. ハイネの小說と Ŝalom Alejĥem の Gimnaziano …………0.45 (4)

★La Rabistoj. 獨文豪シルレルの劇、ザ博士晩年の老熟の筆 ……………………0.80 (4)

★La Revizoro. 露文豪ゴーゴリの喜劇譯筆輕妙眞に喜劇中の白眉 ……………0.70 (4)

★Ifigenio en Taŭrido. ゲーテの傑作、第四回萬國大會で上演せるもの ……………0.70 (4)

★La Batalo de l' Vivo. 英文豪 Dickens 作の humorplena な小說ザ博士の筆蹟あり…… ……………………………0.55 (4)

★Andersen Fabeloj I 及 II. おなじみの丁抹アンデルセンのお伽噺…………各 0.80 (4)

★Rakontoj el Biblio. 聖書物語 ……0.30 (2)

★Lingvaj Respondoj. ザ博士のなした質疑應答を集めたもの ……………………0.55 (4)

★Proverbaro Esperanta. 世界の粹を集めたエス語諺集 ……………………………0.70 (4)

★Originala Verkaro. ザメンホフ博士の諸種の雜誌へ寄稿した物、萬國大會での演說、諸方へ出した手紙、詩歌の大集成眞にザ博士を愛するものは讀め ………7.50 內地 (27) 植民地 (55)

★Predikanto. 聖書の中の一章 ……0.10 (2)

★Eliro. 聖書の內出埃及記…………0.30 (2)

★Levidoj. 聖書の內レビ記…………0.3) (2)

小説

★Anstataŭa Edzino. エスペラントに好意を以てゐたオーストリヤの閨秀作家マクスウエル女史の尖端的小説ロシアで發端し英國を經オーストラリア迄事件は發展する…………………………………並製 1.60 (4) 上 2.40 (6)
★Pinokjo. 童話ピノチヨのエス譯、挿畫多數入初步好適讀物………上 2.50(6) 並 1.80(6)
★Por Recenzo. 現代英國知識階級の生活を書く、行文流麗…………上 1.25(6) 並 0.85(2)
★Fera Kalkanumo. ジヤツク、ロンドンの彪大な長篇物、アメリカの社會生活を扱ふ……………………………………………1.25 (8)
★Saltego trans jarmiloj. 原作界の麒麟兒 Jean Forge の傑作，奇想天外 ……2.60 (8)
★Abismoj. 構想の奇，描寫の妙，行文の輕 Jean Forge 出色の傑作。…………………………………… 上製 2.30 (6)，並 1.55 (4)
★Palaco de Dar̂gero. 妖艶 Pompadour 夫人の戀愛葛藤……Payson 氏譯 ………3.10 (6)
★Stranga Heredaĵo. Luyken の大作，興味津々人物躍動。………上製 3.65 (10) 2.85 (8)
★Vera Historio de Ah Q. 珍らしい支那の飜譯もの。……………………………上製 1.00 (4)
★La vila mano. エスペラント原作界の大家 Bulthuis の作和蘭國民の生活を題材とし詩の如き名文……………………上製……3.30 (15)
★Sivaĝi. 17 世紀の印度の王樣の物語筆者は印度の若きエスペランテイスト……0.85 (4)
★Kio povas okazi, se oni donacas surprize. Fritz Reuter の小説、輸入 …………0.20 (2)
★Hura! Julio Baghy の近著最新刊 ………………………………上 4.50 (12) 並 3.60 (10)
★Se Grenereto. 近代短篇 15 篇許り集めたもの……………………………豪華版 3.00 (6)
★Legendoj. A. Niemojewski 現在の Internacia Mondliteraturo にあるものの初版で 12 篇を收む ……………………………1.20 (4)
★Dancu Marionetoj. Julio Baghy 作 1.70 (2)
★Bulgara Antologio. ブルガリアの名作詩、散文集、作者の寫眞入 ………………1.50 (6)
★Idoj de Orfeo. おなじみの H. J. Bulthuis の原作。…………………………………2.30 (12)
★Pro Iŝtar. 處はアラビヤ，時は紀元前 Luyken 力作の大衆文藝。………………3.65 (8)
★Bengalaj fabeloj. 好評だつた Sivaĝi の作者の第二回作品………………………0.55 (2)
★En Okcidento nenio nova. 世界の讀書界を風靡した「西部戰線異狀なし」エス譯………………………… 上製 3.50 (10) 並 2.50 (8)
★Ribelemaj virinoj. 昔の支那婦人の悲慘な生活を物語る史劇 ……………………0.25 (2)
★Du majstro-noveloj. 曾て Heroldo de Esp. に連載されて好評を博した Storm の小説二篇 …………上製 2.10 (6) 並製 1.25 (6)
★5,000,000. Grenkamp. 近作の短篇をあつめたもの、興味深々 ……………………1.10 (4)

詩集

★Atta Troll. 獨逸の詩聖ハイネの長篇詩、譯者は Zanoni ……………………………0.80 (2)
★Garbo. ブルガリアの Asen Grigorov の原作詩 ………………………………………0.20 (2)
★Novaj Versaĵoj: 露西亞の詩聖 Lermontov の詩集 Bela Manto 譯 ………………0.60 (4)

戲曲

★Barbra. 英文壇に名をあげた Jerom k. Jerome 作の一幕劇 ……………………0.55 (2)
★Nevo Kiel Onklo. 獨文豪 Schiller 作三幕喜劇 Ch. Stewart 譯 …………………0.20 (2)
★Rompantoj. Valjes がバロモロナの萬國大會で自演して好評を博した獨白五篇 0.35 (2)
★Amfitriono. Molière 作の喜劇、あごをはずさぬ御用心 ……………………………0.55 (2)

學習用書

★日本へ來た外國人にエスペラントを宣傳する爲外國の Esperanto-Ŝlosilo を取寄せました。未だ下記のものしか蒐まりませんが段々各國語のものを取寄せます。英語、獨逸語及瑞典語。各 1 部 6 錢……（送料 10 部迄 2 錢）
★Baha'u'llah kaj Nova Epoko. 前號にて Alexander 女史の紹介されたものバハイ敎の敎義、目的、歷史にて詳說せるもの Zamenhof 博士令孃の譯文又流麗 ………………2.00 (6)
★Kompleta Gramatiko. エスペラント許りで

書かれた最も詳細を極めた文法書…2.10 (8)
★Plena Vortaro. ポケットには新撰エス和を又机上には是非これを…………5.00 (18)
★Esperanto per instruaj bildoj. ホテル郵、便局、停車場、男女服裝の部分品等實地敎授式 20×26 cm. の大版 …………1.90 (6)
★Franca gramatiko. エスペラント書きのフランス語文法敎科書…………0.35 (4)
★Oficiala Klasika Libro …………0.40 (2)
★Millidge. エス英辭典 …………4.40 (6)
★同 さく引付…………5.80 (8)
★Esperanto-Lernolibro por popollernejoj. 11月號新刊紹介のもの、美くしい色刷の挿畫カット多數入、會話、物語、一口噺で充たされてゐる rekta metodo の講習會に好適・1.00(4)
★Gajoj horoj por Esperantistoj. なぞ、しやれ、笑話で滿されてゐる、講習會、會話會をにぎやかすには此一册で充分 …………0.30 (2)
★Espranto-Versfarado kaj rimaro. 作詩法講義…………0.12 (2)
★Esp. Grammar and Comentary……
Cox 將軍の英語で書いたエスペラントの文法
…………上製 1.90 (8), 並製 1.35 (6)
★Bennemann エス獨辭典…………2.10 (4)
★Bennemann 獨エス辭典…………4.35 (8)
★Christaller 獨エス辭典 …………6.50 (8)
★Rhodes 英エス辭典 …………2.10(12)
★Zamenhof-Radikaro. Zamenhofaj Radikoj に關する最新にして最も科學的な研究。Zamenhof の著作全部を研究せるもの。3.10 (4)
★Bibliografio de Internacia Lingvo. Stojan 編 今迄世に出たあらゆる世界語、國際語の文獻六千餘種を蒐めたもの…………
……5.00 (書留送料 內地 18 植民地 24)
★Estu homo! Ch. Wagner 著、人類の起源、地上に於ける人類の目的其他種々の道德的觀念に就て語る。文章は Esperantista Akademio に依つて推薦さる …………0.45 (4)

科學社會宗敎其他

★Evoluo de Telefonio. 電話器の發達に就て挿畫入…………0.55 (2)
★Laborĉarto. …………0.12 (2)
★La Bulgara lando kaj popolo. Krestanoff 著 Bulgarujo の歷史、風俗、國情等を語る…
…………1.20 (2)
★Evangelio de Horo. 赤い聖書……0.08 (2)
★Elementoj de fotografa optiko. 寫眞術用初等光學、多數圖入…………0.35 (2)
★Monadologio de Leipniz. ライプニッツの單元論、譯は故學士院長 Boirac 博士…0.10 (2)
★Sendaĝereco de Francujo. 歐羅巴の平和に就て佛蘭西前大統領 Honnorat 氏の言………
…………0.55 (4)
★Etiko. クロポトキンの「倫理學」SAT 發行…………1.00 (6)
★ABC de Sennaciismo. Sennaciismo の入門書…………0.30 (2)
★For la neŭtralismon. …………0.18 (2)
★Vendreda Klubo. Dietterle 博士の編纂になり W. Lippmann の Lingvaj Respondoj de Zamenhof に關する意見其他 ………1.25 (4)
★El la intima libro de Verdurbaj Esp-istoj. Ada 氏等ブルガリアエスペランテイストの隨筆集…………0.30 (2)
★Internacia Kantaro. 世界各國あらゆる國々の有名なる歌のエス譯。…………
………… muzika eldono 2.30 (6)
………… tekstaro 0.80 (2)
★Aŭstralio. オーストラリア風土記、多數の寫眞地圖入の贅澤本 …………3.40 (6)
★Nur volu! …………0.35 (2)
★Je la nomo de l' vivo ………{上 1.25 (4) 並 1.00 (4)}
★Inicado Matematika …………0.35 (2)
★Analitika Geometrio Absoluta. 科學書少きエス界に輝く幾何詳解二部よりなる…………
…………二册で 4.60(12)
★Estu Homo! C. Wagne の倫理學敎科書…
…………0.45 (4)

★新版出づ！

松崎克己著

エスペラント やさしい讀み物

9×12. cm　表紙色刷美麗　定價10錢・稅2錢

★おなじみの松崎氏の著，在庫を全部一掃しましたので，表紙は美麗な洋紙を用ひ，色刷圖案を一新し中の紙も改良し非常に讀み良いものにしました。

★どんな小さいチヨツキのポケツトにも入る大さなので，電車のラツシユアツーで揉まれ乍らも興味深き笑話貳拾餘篇に引きづられて丁寧懇切なる註譯に依り知らず知らずエス語に上達す。

本邦で出版の 學會取次書其他目錄（註文は前金に限る）（學會の振替口座は東京11325番）

	價圓	送錢		價圓	送錢
★ザ博士演說集（カニヤ版）……	0.80	.4	★模範エス會話……	1.20	.4
★夜の空の星の如く（同上和譯）……	0.80	.6	★寡婦マルタ（改造文庫）……	0.30	.4
★我國における外國語問題とエス語…	0.60	.4	★カルロ（四方堂版）……	0.20	.2
★心の片隅……	0.50	.2	★ザメンホフ（ドレーゼン）梶氏和譯…	0.85	.6
★詩集花束……	0.80	.4	★悲慘のどん底　黑川氏和譯……	0.80	.6
★綠の星に憧れて……	1.20	.8	★嬰兒殺し（山本有三）……	0.30	.2
★新覺王（エス文）……	0.30	.2	★父歸る（菊池寬）……	0.30	.2
★惡夢（エス文）……	0.20	.2			

◆日本語エスペラント小辭典（三高）［普及版］（（値下））…… 0.50 .2

◆模範エスペラント獨習（秋田、小坂共著）〔普及版〕…… 1.00 .8

◆日・エス・支・英　會話と辭書 ……〔普及版〕0.65 .4　〔上製〕0.85 .4

◆エスペラント絹ハンケチ（高級刺繡）……綠星光下の地球、旭昇る富士山の二種あり。（男女別申出の事）各1枚68錢送料各2錢（値下）

★エス・羅・日・獨・英・佛　藥品名彙（南江堂版）（見本は東京市本鄕區春木町南江堂へ 醫藥學エスペランチスト必携）1.50 .6

★グラシヤ　史劇　藤澤古雪原作 烟、村上共譯　價20錢　稅2錢

KORESPONDA FAKO

★Francujo:—S-ro A. Boirot, Vieux Chemin de Villiers COEUILLY per Champigny sur Marne (Seine) koresp. kun vendisto.

★Francujo:—S-ro A. Deraisme, 229, Rue St. Honoré, Parizo, koresp. kun japaninoj.

S-ro A. Pinilla, Str. Ballestar 9-30.
S-ro F. Martinez, Str. S. Pablo 15.
S-ro A. Pitar, Plnza del Pueblo 8/10.
ĉiuj en Zaragoza, Hisapanujo PI. PM.

25 jara aŭstro
dez. koresp. kun japaninoj: adreso,
Varejka Alais, privata detektivo.
Wien VI Gumpendorferstr.
143 Aŭstrujo

★Japanujo:—S-ro H. Eguĉi, 19 Sato-machi, Kitakku, Osaka; kĉl. IP. L.

DEZIRAS KORESPONDI
pri anoncilo, afiŝo, kaj katalogo kĉl.
Iŝikawa-maĉi, IV/18, Nakaku,
Jokohama. Tadaŝi Nakamura

★Japanujo:—S-ro M. Okazaki, Oŭkadai 77, Dairen, Manĉurio, dez. kore-p. kĉl.

La membroj de Ŝirahama Ssp.-Societo
volas kores. Kĉl. per IP. L.
skribu al—Isaku Nakano, 541.
Shiraham, shikama-gun, Hiogo-ken,
Japanujo.

地方色ある玩具の御惠贈に與り度し。相當の謝禮又わ拙作品と交換。
東京府下池袋1,281　露木淸彥

La Revuo Orienta——Monata Organo de Japana Esperanto-Instituto,
Ŝin'ogaŭamaĉi III-15, Uŝigome, TOKIO, Japanujo; abono internacia 7 svis. frankoj.

本誌購讀料(郵税別)		
一部	圓0.20	學會維持員には無代頒布す
半年分	圓1.20	
一年分	圓2.40	

本會振替口座番號
- 一般會計用 東京 11325番
- 一般會計用 長野 3283番
- 基本金專用 東京 32089番

昭和六年四月二十五日印刷
昭和六年五月一日發行

編輯兼發行人 東京市牛込區新小川町三ノ一五 大井學
印刷人 東京市神田區三崎町三ノ一四六 高見澤保芳 (一国印刷所)
發行所 東京市牛込區新小川町三ノ一五 財團法人日本エスペラント學會

昭和六年五月一日發行(毎月一回一日發行)
エスペラント研究雑誌ラ・レヴオ・オリエンタ第十二年第五號

定價貳拾錢(送料貳錢)